
気ままに。

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに。

【Nコード】

N3745W

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

”黒ネコ族”の師匠は自由気ままに旅するのが好き。その日も弟子に稽古場を任せて一人放浪の旅へ。「貴様に会うとこれだから……」いくら悪態をついても出会ってしまったものはしょうがない。一番嫌いな気ままじゃない旅に出る。

2011年12/4加筆修正しました。PV1,000越え、ユニーク300越え！ありがとうございます。師匠の物語はもう少し続きます。もう少しお付き合いください。

2011年12／10第1部完結しました。

嫌がらせの出会い（前書き）

師匠って、どんな格闘技やるのでしょうか？

作者にも分かりません。

一応稽古場には5、60人いる設定です。……そんなところほつていいのか、師匠

感想等いただけると嬉しいです♪

嫌がらせの出会い

トントンとリズムを刻むように、右へ左へ軽くステップ。くるりとターンして相手の背後へと回りこむ。

「はい、おしまい♪」

相手の背中に容赦なく手刀をたたきこむ。背中に衝撃をくらった少年はバランスを崩してその場に崩れ落ちる。少年が私を見上げながらちよつと涙目になりながら笑いかけた。

「師匠、相変わらずお強いですね。少しは手加減してください」

「最年少で師範代やってるやつが何言ってるの。しかしまた一段と強くなったわね」

「ありがとうございます！」

いくら師範代といっても中身はまだ10歳そこその少年だ。頭の上の耳を嬉しそうにぴよこぴよこと動かした。彼は素早さで名の通る”白ネコ族”の少年だ。

「じゃあ、そんな強いリア君に後のことはすべてお任せして、私はまた放浪の旅にでも出ようかな」

「そんな、ひどいです！ 師匠！」

「じゃ、後は任せたぞ、師範代♪」

後ろでリアが何か（泣き）叫ぶ声が聞こえたような気がするが、無視してさっさと歩きだす。自由気ままな”黒ネコ族”。それが私の二つ名だ。私は機嫌よく頭の上のきれいな三角形の耳をぴよこぴよこと動かした。

「さて、リアのやつもからかってきたし、今日は何しよっかな」

森の中の一本道をとことこと歩きながら、機嫌良く鼻歌を歌ってみる。そういえば以前、リアに師匠に機嫌が悪い時はあるのかと聞

かれたことがあったな。たぶんない。ただ一つの例外を除いて。

「……何の用だ。黒いの」

「おやおや、相変わらず貴女は機嫌が悪いですねえ。同じ”黒ネコ族”じゃないですか」

「誰が貴様とっ」

「まあまあ落ちついて。また出たそうですよ、あいつ。ついでに僕の名前はミカゲです」

「貴様が来るとすぐこれだ。だから嫌なのよ」

名前のことはさらっと無視。先のことが思いやられながらも、一応話は聞かなければならない。

「で、どこに出たって？」

「ここから北にある”黒の森”です」

「遠……。しかも故郷か。一応伝言御苦労さま。さっさと帰れ」

黒いのにさっさと背を向けて、北を目指して歩き始める。今回はちょっと遠いから帰るのは遅くなるだろう。心の中でリアに謝る。いじりに帰れなくてごめん。

「……何のつもりだ？ 黒いの」

「だから僕はミカゲですって」

私はありったけの殺意を込めて腕にひつついたものを睨みつけた。黒いのはリアよりも1、2つくらい年上だ。その分体も大きい。リアでさえ今がギリギリなのだ。それ以上のものは正直ご遠慮願いたい。

「離れろ、黒いの！」

「（だから、僕はミカゲです）今回は”黒ネコ族”の故郷ですよ。帰るついでについていきます」

一人で気ままに旅するほうが断然好きなんだけど……。仕方がないか。

「死んでも置いていくがいいな、黒いの」

「（だからミ……（省略））かまいません。自分の身くらい自分で守れます」

「……仕方がない。行くぞ、黒いの」

「……………（ハア）」

そんなこんなで、北の”黒い森”に到着。途中黒いのが崖から落ちかけたりしたような気もするが……、まあ気のせいだろう。現に息を切らしながらも私の後ろにいるしね。

「貴女は僕を殺す気ですか!？」

「そんなつもりは一切無かったんだけどな」

「……通常1週間の距離を2日で走破。これを殺す気じゃないと言うんですか」

「……さてと、さっさと片付けて帰ろっかな♪」

とりあえず黒いのはその場に置いて、さっさと森の中に入ってしまふことにした。

「待ってくださいよ。どこに出たかも知らないのに勝手に森の中に入らないでください。だいたい貴女はこの森から……」

「分かってるわよ。私がもうこの森からは歓迎されないことくらい。今度こそ森の中に入っていく。今度は黒いのも文句を言わずについてきた。何よ、急におとなしくなっちゃって。さっきまでみたいギャーギャー騒いでればいいのに。」

「……こんなところだけ、やっぱりリアよりも大人よね」

「? 何か言いました?」

「別に、何でもないわよ。で、あいつが出たのって、何処?」

「ここからさらに北にある”あの洞窟”です」

「……。あいつもいい趣味してんじゃない」

思わずため息をついてしまった。あいつに会うというだけで気が滅入るのに、まさかあそこにいるなんて、嫌がらせとしか思えない。

「行くしかないのよね、嫌でも」

珍しく何も言わず、黒いのは黙って私の後に着いてきた。

嫌がらせの出会い（後書き）

次回は『あいつ』の正体が判明します！ たぶんリア君はここで
お別れです。気にいってくれた方がいればまた出すかもしれません
が……。

私とあいつ（前書き）

今回は師匠の過去の話がメインとなっております。ちょっとシリ
アス気味です。こんなはずじゃなかったんだけどな……。

私とあいつ

森の入口から走って10分。私たちは岩壁にぽっかりと黒い口を開けたような洞窟の前に立っていた。

「さてと、ご対面といきましょうか。危ないからあんたは外で待ってなさい」

「自分の身くらい自分で守れると言ったはずです。どうぞご心配なさらずに」

いつもならそのまま付いてこさせるところだが、今回はそうもいかない。

「黒いの、この中には何がいるのか分かってんの？」

「分かってますよ。貴女に伝えたのは誰だと思っただけですか」

「いちいちムカつく奴ね。分かってんなら外にいなさい。いいわね」黒いのにくるりと背を向けて洞窟の中へと入っていく。そつと黒いのの様子をうかがうと、ちゃんと外にいた。それだけ確認すると、私は歩く足を速めて洞窟の奥へと向かった。

「しかしここは10年前から何にも変わらないわね」

私が最後にここを訪れたのは10年前、私が7歳の時だった。

「そして、あんたは10歳だったわよね」

この洞窟の一番奥に広場のようになっているところがある。そのさらに奥に、一つの人影があった。私はその人影に殺意をこめた視線を送る。

「久しぶりだね、カラン。会えて嬉しいよ」

「私は嬉しくないわ。もう二度とあんたになんか会いたくない。父様と母様を殺したあんたになんか」

「つれないな。俺はお前の兄だろう？」

「お前なんかっ……！」

怒りに震える私の様子なんかお構いなしに、10年前に縁を切った兄、リュウセイが私のほうに近づいてくる。

「俺はずっとお前に会いたかったぞ、カラン」

「私をその名で呼ぶな！」

「おっと、これはあの日に君が捨てた名だったか」

あの日。私の人生で最悪の日。一瞬たりとも忘れたことはない。

この洞窟で、

「お前が父様と母様を殺した日だ……！」

「カラン！ そろそろ出かける時間よ！」

「はい、母様！」

私は手に持っていた帽子を急いで被ると、玄関で待つ母のところへと走って行った。

「カラン、帽子が曲がってるぞ。ちょっとじっとしてろ」

「ありがとう、兄様。さあ、行こう！」

私は母様と兄様の手を掴むと、元気よく外へ飛び出した。

「こらこら。カラン、そんなに急ぐと転んでしまうぞ」

「平気だもん！ あっ」

「だから言っただろう」

そう言って転ぶ直前に私を抱き上げてくれたのは父様。

「えへへ。ごめんなさい。父様大好き！」

父様にギュツとしがみつくと、父様は肩車してくれた。

「さ、ちよっと急ぐぞ。今日は大事な儀式の日だ。遅れたら大変なことになる」

”黒ネコ族”の子供は7歳になると一人ひとり自分用の短刀を贈られる。”黒ネコ族”にとって短刀とは誓いをたてるときに使う神聖なものであり、自分の短刀を持つということは一人前と認められることだ。

「やっと族長の愛娘が7歳を迎えたんだ。今日の祝祭は盛り上がるぞ」

今回儀式で短刀を贈られるのは全部で11人。その中でも族長の娘である私は最後に父から短刀を受け取る。

「リュウセイが7歳を迎えた時のことを思い出すな。あの時も長男だということで盛り上がったなあ。今から楽しみだ」

「大丈夫だよ、カラン。別にそんなに緊張するものでもないから」

「そうよ。ちゃんと”宣誓の言葉”は覚えたわね」

「はい！」

最後に短刀を受け取る者は、”宣誓の言葉”といって、”黒ネコ族”として誇りを守って生きていくことを誓わなければならない。だいたい”宣誓の言葉”を言うのはその儀式を受ける者の中で最も身分の高い者だ。

「三年前の兄様、かつこよかったなあ。私も兄様みたいに頑張る」
「そうそう。その意気だ。頑張れよ、カラン」

そうしているうちに、儀式がおこなわれる”母なる洞窟”へとたどり着いた。この洞窟は”黒ネコ族”がすむ森の中でも最北端に位置し、儀式のとき以外では例え族長でも立ち入ることは許されていない。儀式を迎える子どもたちは、順番に洞窟の中へと入って行き、その奥で待つ族長から短刀を受け取る。

「それじゃ、私たち先に洞窟で待っているから。リュウセイ、カランを頼んだわよ」

儀式の準備をするため、父様と母様は先に洞窟の中へと入って行った。

「カラン、他の子たちはもう並んで待ってる。僕たちも行こう」

儀式を待つ子たちの中に混じって一人でいると、急に不安になって周りをきょろきょろと見回した。すると、兄様と目が合った。兄様は優しく微笑むと、手を振ってくれた。それだけで、不安が吹き飛んだ気がした。

儀式の順番を待つ間、いろんな人から祝福の言葉をもらった。それにいちいち笑顔で答えるのは疲れたけど、家族のためだと思って乗り切った。

「次、族長の娘、カラン」

「はい」

副族長に名前を呼ばれて洞窟の中へと入る。この先に父様と母様が
いるはずだ。確か受け取って外に出たらそのまま演説台に上って
”宣誓の言葉”だったよな。頭の中で何度も繰り返し練習した言葉
をもう一度復習する。洞窟の広場が見えてきた。もうすぐ私の儀式
が始まる。

私とあいつ（後書き）

ちなみに、キャラの名前に漢字をあてると、

カラン↓花藍

リュウセイ↓流星

ミカゲ↓御影

リア↓李亜

となります。師匠にはもう一つ名前があります♪ そのうち出てくるかと……。

あの日から（前書き）

今回も過去の話がメインです。あの事件とその後の話です。

あの日から

広場の奥の一段高くなった所に、父様と母様がいた。二人ともにっこりと笑って私を待っている。

「おめでとう、カラン。さあ、儀式を始めろわよ」

母様がひと振りの短刀を捧げ持ち、それを恭しく父様が受け取る。父様は私のほうへと向き直ると、その短刀を私に差し出した。

「これは命を奪うものではなく、誓いを守るものだ。生涯をかけて己の誇りと大切な者との誓いを守れ」

「はい」

私は短刀を受け取ると、それを両手で抱え込むようにして持つ。これで私は一人前として認められた。外でそれを宣言するため、私は出口のほうへと足を向けた。

「待て」

急に父様が私に静止の声をかけた。目を閉じて、じっと何かに聞き耳を立てている。どんな音もたてちゃいけないような気がして、私は息をひそめた。自分でも耳を澄ませてみる。

「足音？」

儀式中、洞窟の中へは儀式を行うもの、行われるもの以外の立ち入りを固く禁じられている。よって、一族のものではありえない。

「！？ 逃げろ！ カラン！」

父様が何かから私をかばうように立ちふさがった。瞬間何かが刺さる音がした。

「あゝ、はずしちゃったか。まあいいや。後は族長一家だけだしね」「兄、様？」

父様を挟んだ向こう側にはそこにいるはずのない兄様が立っていた。その足元には母様が倒れていた。

「兄様、母様から血が出てる。早く助けてあげて！」

「何言ってるんだ、カラン。これは僕がやったんだよ。あの女が復ひと

活するためには父上も母上も邪魔だったからね。もちろん、カラン、お前もだよ」

「……、リュウセイ、やめろ。実の、妹、だぞ」

「父上、まだ生きてらしたのですか？　しぶといですね」

兄様が手の中でクルクルと短刀を回しながら私たちのほうへ近づいてくる。

「兄様やめて！　短刀は命を奪うためのものじゃない、って父様が」「何言ってるんだい、カラン。短刀っていうのはね、こういう風に使うためにあるんだよ」

「やめて!!!」

私は父様と兄様の間に立った。

「カランそのうち君にも分かるようになるよ」

その時、なぜ兄様が私の鳩尾に短刀ではなく手刀を叩き込んだのか、私はいまだに分からない。私の意識は一瞬で真っ暗な暗闇に飲み込まれた。

「あの後、私は父様と母様の遺体と一緒に発見された。そこには血のこびり付いた私がもうはずだった短刀が落ちていた。そしてあなたは行方不明。その後は想像がつくでしょ。私は一族から追放された。親殺しの罪でね」

無意識にギュッとこぶしを握る。当時、何も訳が分からないまま森の外へ放り出され、何度も獣に襲われかけた。現在稽古場を持つほどの腕を鍛えだしたのはその頃からだ。

「何であの時私を二人と一緒に殺さなかった！　あの時の苦しみは……思い出したくもない」

何かから自分を守るように、自身の体を抱きしめる。足元に視線を落とし、寒気が消えるのをじっと待つ。そこでふと影が差した。

「お前が必要だったんだ。強くなったお前がな」

急いで顔を上げると、至近距離にいつがいた。そして、昔のよう
に私の頭を優しく撫でた。

「触るな！」

手を払いのける。不用心に相手を近づかせた自分の無防備さを呪
った。こいつの前だと調子が狂う。

「東の森へおいで。そこでお前を待ってる。すべてはそこで始まる
から」

「待て、用事はまだ……」

どこかに隠し通路でもあるのか、あいつの姿が一瞬で消えた。

「くそ。どうして私はいつもこうなのよ……」

自分の悪態をつきながらも、いつまでもここにいる必要はないの
で出口へと向かう。広場の出口に、人影があるのが見えた。

「終わりましたあ？　今回は会えたみたいですけど、また逃げられ
たんですねえ」

「私は洞窟の外にいろんなと言ったはずよ、黒いの」

「それは僕の自由です。で、東の森に行くんですか？」

「行くしかないでしょ。さてと、いつまでもここにいたら他の奴ら
に見つかっちゃう。さっさと退散しないと」

「僕も行きますよ」

「結構よ」

黒いのをその場に残し、私は一人洞窟の外に出た。

あの日から（後書き）

次回、師匠（たち）は旅に出ます。あの子も再登場、……しますかね？ 次回からはコメディ風にしたいと思います。シリーズは苦手だった！

第2の故郷（前書き）

意外とリア君が好評だったので再登場します。相変わらず師匠に
いじめられています。

第2の故郷

「ただいま〜！ リア、元気にしてた？」

「師匠！？ お帰りなさい！」

まるで子犬のように駆け寄ってきたのは稽古場を任せているリアだ。”白ネコ族”特有の白い尻尾をパタパタと元気よく振っている。こいつは生まれる種族を間違えたらしい。

「今回はわりと早かったですね。これから稽古つけてくれるんですか」

「うーん、それがね、またこれからすぐに出かけなきゃいけないのよ。今回はマジで長期になるから一回顔見せに戻ってきたというわけ」

「そんなあ……。僕またお留守番ですかあ？」

いつもはピンと元気よく立っているリアの耳がしおれた。

「そんなこと言ってもね、リア以外に師範代任せられる奴いないし。じゃあ、頑張ってるね♪」

につこり笑って肩をポンと叩くと、リアはその場にしゃがみこんで地面にの字を書き始めた。可愛いからそのままにしておこう。

「よし、お前ら！ 久々に私が稽古つけてあげるわ。順番に並びなさい」

稽古場の奥のほうでそれぞれ稽古していた少年少女たちが一斉に駆け寄ってきた。

「今日は師匠が稽古つけてくれるんですか！？ 僕が一番！」

私が、僕がと騒ぎ立てる子どもたちを眺めまわしてずっと深く息を吸う。

「順番！！ 全員相手してあげるから、一人ずつ並びなさい！」

今度は素直に返事して一列に並ぶ子どもたち。先頭の少年が一歩前に出てお願いします、と頭を下げる。

「あら、入ってきた時よりもずっと礼儀正しくなってるじゃない」

「リア師範代は礼儀にだけは厳しいですから」

なるほど、あいつのおかげか。私が教えるよりもずっといい。

「リアも、何で私に習ってあんなに礼儀正しくなれたのかしら。奇跡としか言いようがないわね」

実際私が直接教えた奴らはリアを除く全員が礼儀もなくでもない好戦家だ。まあ、リアも訓練だけなら組み手とかを嬉々としてやるのだが。礼儀関係も教えた記憶がない。

向かってくる子どもたちに足払いをかけながらそんなことを考える。体制を崩した子どもたちを片っ端から投げ飛ばす。もちろん加減してだが。

「って、ちょっとあんたたち！ 一人ずつって言ったでしょ!？」

稽古場はもう乱戦状態だ。背後からも誰かが近づいてくるのが分かった。

「甘いわよ、リア！」

背後から近づいてきたリアの腕をとって投げとばす。

「ちえ、ばれましたか。さすが師匠です」

結構本気で投げたのに平然と受け身をとって即座に立ちあがるリア。
ア。

「あんた、また強くなったわね。師匠として嬉しいかぎりだわ」

「光栄です！」

そう言っていきなりリアが飛びついてきた。反射で受け止めてしまった。すぐに周りの子供たちが師範代だけずるい！ とかよく分からないうちに一言で一斉に飛びついてきた。

「お前らやめろ！ 稽古にならないじゃない！ つか真面目に私死ぬ!!!」

5、60人の子どもたちに押しつぶされて思わず悲鳴を上げる。もうただのじゃれあいだ。

「あなたたちは何やってるんですか」

呆れた顔をして稽古場に入ってきたのは外で待っていたはずのミカゲだ。

「あ、ミカゲさん！ お久しぶりです」

すぐにリアが反応してぴよこんと立ち上がる。そういえばこいつは一時期この稽古場に通っていたな。ちなみにリアの兄弟子。私が師範代にしようと思っていたら、やめていきやがった。だから実力は実質リアよりも上だ。私には到底かなわないがな！

「そろそろ出発しないと日暮れまでに隣の村に着きませんよ。まあ、夜の森で狼たちと乱戦しながら行きたいのなら別にかまいませんけどねえ」

ミカゲが言う狼とは”狼族”のことだ。夜行性で私たち”ネコ族”とはあまり、というよりかなり仲が悪い。夜の森をうろついていると必ずと言っていいほど襲われる。

「別に襲われても追い返すだけだから別にいいけど、面倒臭いわね。じゃ、私出発するわ」

まだ引っ付いている子どもたちを引き？がしながら稽古場の外へと向かう。バイバイ師匠！ とか言いながら手を振って見送ってくれる子どもたち。……いい子どもたちをもったわ、私。

ミカゲを伴って稽古場を出ると、誰かが服の裾を思いつきり掴んだ。突然のことにバランスを崩しかけながらもその掴んだ相手を睨みつける。

「どういうつもりかしら？ リア」

「僕はダメなのに、ミカゲさんは連れて行くんですか？」

……ウルウルした目で上目遣いに見上げてくるのは反則だろう！
？ って、いかんいかん！ 可愛いからこそ今回は連れていっちゃダメだわ。

「ダメ。あんたにはあの子たちのこと守ってもらわなきゃいけないんだから。あいつらのこと頼むわよ」

最後に頭をポンポンと撫でて今度こそリアに背を向ける。

「……………（あいつ付いてくるな）」

「……いい加減出てきたら？ いるんでしょ、リア」

稽古場を後にしてかなりのスピードで歩く（いや、あれは走るだ！ byミカゲ）こと3時間。足も止めず、振り向きもせず、背後に声をかけた。

「……いつから気づいてたんですか？」

「あんたが私たちに追いついたところから」

「……最初からですか」

隠れることをあきらめたのか、消していた気配を元に戻してリアは私たちに近づいてきた。

「子どもたちはどうしたの？」

「トーマさんに任せてきました。師匠たちが戻ってくるちょっと前に、フラッと帰ってきてそのまま奥で寝てたんですよ」

「あいつ、帰ってきたの」

トーマとは私の弟子の一人で、確か最年長のはずである。実力は、私が一番最初に師範代に任命した男だから十分すぎるほどある。

「ま、あいつが帰ってきてるなら心配ないか。帰ってきたときに文句を言われそうね」

トーマは何故かびっくりするほど私に似ていて、一人放浪の旅をするのが好きなのだ。でも、責任感強いほうだから、子どもたちを放ってどこかへ行ってしまうことはないだろう。

「……帰りにトーマの好きな魚でも持って帰ってあげるか」

第2の故郷（後書き）

トーマ↓冬馬

です。ちなみに、16歳の”虎ネコ族”です。

そのほかのキャラをまとめてみると、

師匠↓17歳

リア↓12歳

ミカゲ↓14歳

リュウセイ↓20歳

です。種族は小説の中で説明したとおりになります。

怪しい集落（前書き）

今回も師匠は素晴らしい脚力を見せてくれます。番外編もちよくちよくアップしていきます♪

怪しい集落

リアと合流したところから歩いて（走って！ byミカゲ&am p;リア）3時間ほどのところに、一つの集落があった。人（ネコ？）の気配はなく、荒れた形跡もない。

「っしゃ！ 取り放題♪」

「いやいやいや、待ってください師匠！ それは悪役のセリフですから！」

「えー、いいじゃない。誰もいないし。私に拾われて使われるほうが道具も喜ぶわよ」

「どういう理屈ですか！？ そもそも変だと思いませんか？ こんなにきれいに残っているのに誰もいないなんて」

「それもそうですね。普通は人が一人もいなくなるのは襲われた時か、災害の時ですからね。どちらにしてもこれはきれいですねえ」

「むう、あんたたち優秀すぎよ。誰から教わったの、そんなこと」

「「立派な反面教師がいましたから」」

「……それって、私？」

二人がほぼ同時にため息をつき、私に背を向けた。何よ、鍛えたのは私じゃない！

「リアの言うとおり、これはちょっと怪しすぎます。流行り病の可能性もありますし、下手したら入った瞬間苦しむ羽目になりますよ」それは怖い。というわけで私はおとなしく二人の意見を聞くことにした。うん、私偉い。

そんなことを考えていると、ミカゲにすごく冷たい目で見られた。あいつ、私の心が読めるのか！？

「……貴女の表情は分かりやすすぎます」

「え、そうですか？ 僕には全然分かりませんけど」

「……………（鈍い師弟め！！）」

ミカゲがさつきよりも深くため息をついている。まあ、それは今に始まったわけじゃないから放っておいてもいいか。

これじゃ誰が保護者か分からない、なんて聞き捨てならないことをぶつぶつ言っているミカゲを何とか無視（私偉い！）して、集落から少し距離をとりながらリアに聞いてみる。

「リア、何か聞こえるか？」

「いえ、特に何も。生きているものがある音はしません」

私たちそれぞれのネコ族には特殊な力を持つ子供がたまに生まれる。リアもその一人で、彼は異常な聴力を持つ。ちなみに私とミカゲ、トーマも持っていて、私は視力、ミカゲは嗅覚、トーマは石や植物、ようするに自然界にあるものから記憶を読み取る。ま、意識して使わないと普通の奴らと同じなんだが。

「そうだな、私が”見て”も動くものはない」

「いえ、何かいますよ。何か、……血の匂い？」

「何で疑問形！？ 血の匂いなんてお前一発で分かるだろ！」

「だから普通の匂いじゃないんですよ。たぶんここにいるのはネコじゃない」

ほんの少し、ミカゲの顔が引き締まる。珍しく緊張でもしてるのか？ ……それにしてもネコじゃないものか。森の中にこうやって集落を作るのはネコの一族しかない。狼はそもそも大人数で生活するのを嫌うから集落を作るとは思えない。

「もともと住んでいた一族が何かに襲われたのか、それともその前に気がついて逃げ出したのか……。後者だといいな」

「そうですね。僕もここに住んでた人が無事だったらいいなと思います」

「どうします？ 毒とかウイルスとかがいるような匂いはしませんし、入ってみますか？」

ミカゲが少し悪戯っぽい顔をしながら見上げてくる。これは私を試している顔だな。私の度胸、見せてやろうじゃないの。

「なら入ってみようか。ここ突っ切ったほうが次の村近いし」

私の眼にはこの集落をまっすぐ突っ切った先に村があるのがはっきりと見えていた。

「ちょっと怖くないですか？ 迂回しましょうよ……」

「お、怖がりだね、リア。かーわいい♪」

「！ からかわないでください、師匠！」

顔を赤くして拗ねているリアを笑いながら集落の中へと一歩踏み出した。後にミカゲ、リアと続く。……数時間後、私たちはリアの意見を聞かなかったことを後悔することになる。

怪しい集落（後書き）

補足

トーマ君の特殊能力、く記憶を読み取る力く

1. 木や花、石に触れる。
2. 意識を集中して知りたい記憶を探す。
3. 記憶を覗かせてもらう。
- 例）リアがこの石に座って花占いをしていた。「師匠は帰ってくる、帰ってこない、……帰ってこない!？」リア号泣。
4. 可哀想な弟子を慰める。

巨大生物（前書き）

リア君は相変わらず可哀想な子です。

誤字脱字等を見つけた場合は、随時直していくので指摘お願いします。

巨大生物

しばらく集落の中を探索した後、中央の広場（たぶん祭典用だろう）に集まって、それぞれの意見を交換することになった。

「私が見たところホントに何もないわ、ここ。きれいさっぱり人だけが煙のように消えちゃったみたい」

「僕も同じ意見です。地面を歩く音どころか、空気が動く音すらしません」

私とリアが頭を抱える中、黒いのが一人だけ気難しい顔をしていた。

「おかしい。……この匂いは一体どこから……？」

「何か分かるのか、黒いのか？」

「だからミカゲですってば。……何か変なにおいがするんですよ。血のような違うような……」

突っ込むべきところはしっかり突っ込んで黒いのが答えた。さすがうちで一番の突っ込みだ。リアではまだまだ足りない。

「だいたい、何処から匂うのかもよく分からないんですよ。強いて言うなら、この集落全体から、でしょうか」

「うわ、やめてよ。地面掘ったらそこらじゅうから変なもの出てくるとか……。考えただけで寒気がする」

「地面？……（うわあ、なんかすごくいやな予感が）」

「どうしたんですか？ ミカゲさん」

「リア、お前だけでも先に逃げ——！？」

黒いのがリアに何か言いかけたところで、地面が割れた。

「うわ、何だこりゃ！ 意外と深いな」

「何変なところで感心してるんですか、師匠！」

「二人とも！ 落ちますよ！ 舌嚙まないように口を閉じて——！？」

「自分で言っておきながら、噛んだね」

「噛みましたね」

身体能力が総じて高い私たちは特に苦勞することもなく、5 mほど落ちて着地した。一人だけ私たちに背を向けて口元を手で押さえている黒いのは、まあ、アホなんだろう。

「ひはひ（痛い）。ひははんはっは（舌噛んじゃった）」

「僕、ミカゲさんがこんな間抜けだったなんて、初めて知りました」
「まあ、私の弟子だからね」

「なるほど」

納得するな！ と私は心の中で突っ込んで、一人痛がっている黒いのを無視してあたりを見渡した。黒いのが言ったことが本当ならば、このあたりが匂いの元凶……かもしれない。

「……師匠、何か聞こえます。何か、いま聞きたくないような音が……」

私もリアが見つめるほうへ視線をやる。しばらくすると、暗闇の先のほうに何かぬめぬめと光る、白っぽいものが見えた。

「ひっ」

隣でリアが小さく悲鳴を上げる。そういえばこいつ、トーマに似て両生類とか爬虫類とか、ああいう系統のもの、すっごく苦手だったよな。

私たちの目の前には巨大なナメクジのようなものがいた。しかも体中から青い体液のようなものを撒き散らしている。

「気持ち悪……」

「なるほど、匂いの元凶はあれでしたか」

昔から私は目の前にいるものの小さい奴を持ってトーマやリアやらを追い回してるが、正直このサイズまででかくなると気持ち悪い。少なくとも積極的に触りたいとは思わない。

「黒いの、気持ち悪くないの？ 冷静に見えるけど」

「貴女に昔、散々これで追いかけまわされましたから」

だからもう慣れました、と相変わらず可愛くないな。黒いのかくせに。

「どうする？　これやつけないとたぶんここから抜け出せないよ。ちなみに私は嫌」

「僕は絶対嫌です！」

「僕もできれば触りたくないですね……」

こんな会話を繰り返しながら、私と黒いので素早くアイコンタクト。悔しいがこいつは意思疎通というものがしやすい。

「じゃ、公平にじゃんけんで……！」

と口では言っておきながら素早くリアの両手を掴む。ちなみに黒いのは両足を抱えている。また黒いのとアイコンタクトして無言でタイミングを合わせる。

「じゃ、リア、頼んだわよ！」

「普段仲悪いのに、何でこんなときだけ息ぴったりなんですか！？」
何かリアが泣きごとを言っていたような気がするが、いつものことなので無視した。

巨大生物（後書き）

次回、リア君の可哀想なターンが続きます。

新たな敵（前書き）

やっとりア君が解放されたと思ったら、また敵です。

久々に師匠の真面目モードが入ります。常にふざけてるからな、師匠って。たまには真面目になってもらいました。

最近ミカゲ君も師匠と仲良くなってきました。もともと師匠はミカゲ君のこと大切に思ってるんですよ。照れ屋なんです。好きな子はいじめたくなるというあの原理です。

新たな敵

「嫌ー!!」

「ほら、頑張ってリア!」

「早くしないと暗くなって出られなくなりますよ」

巨大ナメクジにリアが挑み始めてから早3時間。リアは逃げてばかりで戦いになってない。リアの背後の壁際に並んで座った私と黒いのは時々面白がって声援という名の茶々を入れる。

「私、こんなナメクジに負けるような鍛え方をした覚えはないわよ!」

「そんなこと言ったって! 嫌だ、こいつ気持ち悪いです! 触りたくないし触られたくない!!」

「もう、しょうがないわね……」

「お、師匠のお出ましですか」

立ち上がった私に反応する黒いの。その黒いのを上から見下ろしながら私は不敵に笑う。その顔を見た黒いのが顔を引きつらせる。

……さすがは一時期私の弟子をやっていただけはあるわ。いい勘してる♪

「行きなさい、黒いの!」

「えー、僕が行くんですかあ? ここは可愛い弟子を助けるために師匠が出る場面ではないですか」

「師匠命令よ!」

「もうとっくに貴女の弟子ではなくなりましたけどね。……仕方がない、困った師弟ですね」

そう言って懷からやや大ぶりのナイフを取り出して立ち上がる黒いの。

「リア、ちょっとそこどいてください!」

リアが黒いの前からどいた瞬間、地面をけた黒いのがもうナメクジの目前まで迫っていた。そのままナイフを一振り。一撃でナメ

クジを沈める。

「黒いの、もう一度道場戻ってきて師範代やる気はない？」

「嫌です」

あっさり、しかもさわやかスマイル付きで黒いのは言い切った。ここまで綺麗に即答されると帰ってきてほしくもない相手だとしてもちよっとムカつくわね。

「何よ、私だっていくらあんたが「はい、ストップです」

私がちよっとキレたのを感じたのか、リアがストップをかけてきた。さすが弟子。自分の師匠のこと良く分かってるわあ。

「ミカゲさん、僕の代わりに倒してくれてありがとうございます。おかげで助かりました」

エンジェル・スマイル

必殺、リアの天使の微笑み。この技は老若男女を問わず、すべてのネコに通用する。試したことは無いが、たぶん狼にも効くだろう。もちろん、脇で見ていた私にもしっかりと効いている。可愛いなあ。

「……まあ、文句は後でしっかりと、然るべき相手に。とりあえず上に戻りましょう」

黒いのは少し下がると、助走をつけて跳んだ。続いてリアも。……足自慢の若いのはいいわ。二人とも元気ね。

「何やってるんですか、師匠！ 早く来てください。これくらい師匠なら余裕でしょ？」

「えー、私も跳ぶの？ リアたちが引っ張ってくれないの？」

「ふざけてないで早く上がってきてください。いつまでもそこにいるとまたナメクジがきますよ。あと2、3匹分くらいの匂いがします」

「それを早く言いなさいよ！」

私は助走無しでそのまま軽く5mほど跳ぶ。余裕で穴を抜けた私を黒いのとリアがジトつとした眼で見つめる。

「……元気じゃないですか、師匠」

「……………（相変わらず嫌な人だ）」

あれで僕たちより強いんだからー、とかリアと黒いのが二人で愚

痴っている。何よ、それでも私はあんたたちの師匠よ。これくらいで出来なきゃあんたたちの師匠なんか勤まらないわ。何か文句ある？

私が一人拗ねていると、突然リアの耳がピクツと動く。とたんに目を細めて辺りをうかがう私たち3人。さっきまでの弛んだムードは何処へ行ったのやら、全員の顔が厳しいものへと変わっていた。

「東方、1、2……10匹？ たぶん狼です」

「みたいね。10匹なんてそんな大勢でいるところ初めてみたわ。とりあえずこの人数であれを相手するのは面倒ね。隠れましょう」

私の眼ははつきりと東からやってくる狼たちの姿が見えていた。

「あいつらが来るのが東からじゃなかったら先に進むんだけど……」
私たちはもと来た道を音を立てずに駆け戻る。集落の外に出ると、各自手頃な木に上り、姿を隠す。木の葉のおかげでこちらからは狼の様子が確認できるが、あちらからは見えないだろう。

東からやってきた狼たちは私たちが落ちた穴を覗き込むと、リーダー格っぽい狼が口を開いた。

「いいか、お前ら。ナメクジの溶け具合からまだ奴らはこの辺に居るはずだ。探せ！」

あのナメクジ溶けるのか！ って、突っ込むところはそこじゃない。あいつら確かに、奴らはまだこの辺にいる、と言った。奴らはもちろん私たちのことだろう。

「……まずいな」

狼たちは総じて鼻がきく。最初から私たちを探すつもりなら匂いでこちらにすぐ気がつくだろう。

私たちと狼の距離、100m。

新たな敵（後書き）

次回、ちょっと話はシリアスに。物語が少し進みます。新キャラも出る予定です♪

双子の狼（前書き）

新キャラ登場です。とはいってもほとんどしゃべりません W W

そして師匠が大暴れます♪ やっぱ強いです、師匠は。

双子の狼

「師匠、どうしますか？」

「どうするも何も、やるしかないでしょう。ちよつと面倒だけど。あんたたち二人で4人潰しなさい。後は私がやるわ」

「大丈夫ですかあ？」

「……なめてんの、黒いの？」

いちいちムカつく黒いのは放っておいて、狼たちの背後をとるため、気配を殺しながら移動を始める。幸い私のほうは能力のおかげで敵を見失うことはない。

「さて、誰から潰そうかしら？」

今は誰もいなくて空き家となっている建物の影に隠れて、敵が近づくの待つ。しばらくすると、一匹近づいてくる。あいつからでいいか。

「—————！？」

不意を突いて敵の口を塞ぎつつ、影に引っ張り込んで鳩尾に手刀を叩き込む。声もなく沈んでくれた。しかも周りは気がつかなかったらしい。

周りをこっそりうかがってみると、あっちもちょうど一匹沈めたところなのか、リアが親指を立ててウインクしてきた。……いちいち可愛いなあ、もう。

そのまま続けて2人ほど沈める。このあたりで相手も異変に気がついたらしい。

だがもう遅い！！

今までの場所を離れ、敵に気がつかれないようにリアたちのもとへ行く。口の動きだけで伝える。

「（リーダー沈めてくるから、後頼む）」

「（了解です）」

……いつか役立つだろうと思ってこの訓練させておいてよかった

わ。あの時は単なる遊びだったのに。

私が元の場所に戻ってあいづらに合図すると、二人は同時に別方向から飛び出す。それぞれ一番近くにいた相手を掴み、投げる。そしてそのまま4人まとめて乱戦へ持ち込む。

……我が弟子ながら良い腕してるな、こいつら。

私のほうもただ見とれているだけではなく、行動を開始する。リアたちに気を取られているリーダー格の奴の背後へ回る。

さすがリーダー、私が背後に回った時点で気がついて振り向いた。……だから、もう遅いんだって。

「セッ！」

気合いとともに回し蹴りを放つ。……あ、掴まれた。でも、

「甘い！」

掴まれた脚を軸に体をひねり、全体重を乗せた回し蹴り。……蹴るのっていいよね。スッキリ☆

私の渾身の一撃を防ぎきれるはずもなく、側頭部にクリーンヒットする。そのまま崩れるリーダー格。大したことないわね！！

「師匠！ 終わりましたか？」

「今終わったところよ。そっちは？」

「それが……」

振り向くと、そこには困った顔をしたリアと黒いのが居た。そして、そのやや下に視線を向けると、

「どうしましょう、この子たち」

一目で狼族のそれと分かる犬耳を頭に乗せた男の子と女の子が正座していた。しょんぼりと項垂れている様を見ると、つい抱きしめてしまいたくなる。

「……これだから貴女は」

黒いので声が気がついた。私は狼族の二人をまとめて抱きしめていた。だって、可愛いんだもん！！

「あんたたち、名前は？」

「……フィア」

「……ファイイ」

「……双子？」

同時にこくりとうなずく双子。女の子のほうがファイアで、男の子のほうがファイイね。

「あんたたち、狼族よね」

こくり。

「もしかして親いない？」

こくり。

「私たちと行きたい？」

こくり。

よし、連れていこう！

ファイアとファイイの手を掴んで立ち上がる。そのまま進もうとして、リアと黒いのに止められた。

「なんでよお。いいじゃない。この子たちもう戦う気なさそうだし、可愛いし」

「可愛いの関係ありませんから！ 狼族の子を連れていくなんて、正気ですか！？」

「なあに、リア、嫉妬お？ 今まで可愛い系は自分だけだったから、かまってもえなくなると思ったんでしょ。大丈夫よ。ちゃんとかまってあげるから♪」

「違いますって！！ それと誰が可愛い系ですか！？ かまってほしいなんて一言も行ってません！」

「いや、リアは無言でかまってと言っているようなものですからねえ」

「ミカゲさんまで！？ 誰か僕の味方はいないんですか！？」

うわー！ と叫び声をあげているリアも双子と一緒に懷に抱え込むと、じっと見つめる。

「……そんなに見つめても、僕はその中に入りませんから」

「冷たい」

「どうとでも言うてください」

一人離れたところで拗ねている黒いの（拗ねてない！ b y ミカゲ）は放っておいて、腕の中の三人を力いっぱい抱きしめる。

「ムグウ、し、師匠、苦しい、です」

腕の中らリアのうめき声が聞こえた。どうやら力を入れすぎてしまったらしい。よく見ると双子も顔を真っ赤にして息苦しそうだっ

た。

「うわぁ、ごめんごめん」
手を離れたとたん、ゼエハアと荒い息をつく三人。……お、双子

の表情が少し柔らかくなった。落ちついてきたのかな。

「やっと解放されて安堵しているんですよ。いくら狼族とは言え、子供を殺すつもりですか、貴女は。自分の力の大きさをしっかり理解してください」

「うう、ごめんさい」

黒いのに怒られた。でも悪いのは私なのできちんと謝る。双子ちゃん、ごめんね。リアも。

「だいたい、貴女は今ちょっとテンション上がりすぎです。落ちついてください」

……しょうがないよ、それは。だって双子ちゃんが可愛すぎるんだもん。

双子の狼（後書き）

双子ちゃん、次回からは緊張も解けたのか、ちゃんと喋ります♪
ついでに襲撃者たちの謎も明らかにするかと。

あいつの策略（前書き）

双子ちゃん……可愛い!!

自分で書いておきながら言うのもなんですが……。

あいつの策略

狼の双子が落ちつくまで少し休憩し、二人が落ちついたところで事情を訊くことにした。

「あのねー、フィアたちはある人に頼まれて来たのー」

「来たのー」

「誰に頼まれたの？」

「フィアたちには分かんないー」

「分かんないー」

先に話しているのがフィア、後に繰り返しているのがフィィ。可愛いんだけど、若干うざいな。慣れるまでの辛抱か。

「で、あんたたちはどうするの？ 狼族のところに戻る？」

「それは絶対に嫌ですー」

「嫌ですー」

双子が泣きながら抱きついてきた。そんなに辛かったのだろうか、狼族の中での暮らしは。

さすがに小さい子供が泣きついてくるのは情に訴えるものがあるらしく、リアと黒いのの顔は幾分か柔らかくなっていた。

「私たちはお父さんもお母さんもないからね」

「いっつもいじめられてたの」

「でもね、今回の”さくせん”で”おてがら”たてたらね」

「族長さまがお父さんの代わりになってくれるって言ってたから」

「自分たちから志願したのー」

「したのー」

私たち3人は言葉を失った。こんなに幼い子供が自分の身を守るために自らこんな危険な作戦に加わったというのだ。その族長がどんな人物なのかは知らないが、おそらくこの双子は騙され、利用されている。

「私たちと一緒に行こう。大丈夫。お姉ちゃんはとーっても強いの」

よ♪」

そう言って二人を抱きしめると、二人はにっこりと笑った。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「フィイたちも何か役に立ちたい」

「ありがたい、その気持ちだけで十分よ。リアに黒いのも文句ないわね」

振り返りながら聞くと、二人とも首を縦に振った。

さて、と。出発する前にもう一仕事するか。無言で黒いのが太い縄を差し出してきた。気がきくな、こいつ。リアも見習えよ。

私はまだ気を失っているリーダー格をこれでもかというほどきつく縛りあげた。まだ起きないので軽く頬をはたく。そこで呻きながらリーダー格が目を覚ます。

目を開けること数秒。自分の状態を確認して自分の状況を理解したらしい。話が早くて助かる。

「さあて、洗いざらい吐いてもらいましょうか？」

「……師匠、目が悪人です」

「貴女の辞書には手加減という言葉がないのですか？」

「敵に対してはね」

「（絶対にこの人だけは敵に回したくない）」

何もしゃべらないが、気配だけで双子もおびえているのが分かる。敵に女という理由でなめられるわけにはいかないからね。このぐらいがちようどいいのよ。

……と思ったら、

「まったく貴女は……。相手が怯えて口もきけなくなってるじゃないですか。代わってください。僕がやります」

何やら不気味な笑顔を浮かべた黒いのがリーダー格を連れて私たちから離れていった。何するつもりだあいつ!? あんな生き生きとしている黒いのは初めてみた……。

—————数分後—————

妙にぐったりとしたリーダー格と、妙に肌がつやつやとしている黒いのが戻ってきた。ホントに一体何があったんだ！？

「だいたい分かりましたよ、敵が」

「大丈夫か、お前……」

思わず敵のほうを心配してしまった。声をかけても放心状態でピクリとも反応しない。もとは仲間だったはずなのに双子は怖がって近づこうともせずリアの後ろに隠れている。ムムッ！ いつの間にリアに懐いたんだ、この二人！

「どちらかといえば、残念なお知らせになりますね。僕の予想が正しければですけど」

「誰が依頼人か分かったのか？」

「まだ僕の予想ですけどね。……たぶん、”あの人”が関わってます。こいつも実際に依頼人の顔を見たわけではないそうなので、あくまで僕の予想になりますけど」

「……真相は進んでみないと分からない、か」

黒いのがいつになく真剣な顔をしているから、私をからかって楽しんでる可能性は低い。

もしあいつが関わっているなら、この先少し慎重に進まなければならぬだろう。

「何がしたいんだよ、あいつ」

そこには不思議そうに私を見上げる双子が居た。

あいつの策略（後書き）

次回、隣村に入ります。

女の子の楽しみ（前書き）

今日は師匠が珍しく女の子らしいです。そしてまたリアは可哀想な子です。

師匠の二つ目の名前も出てきます。

女の子の楽しみ

「やっとなつた。結構ぎりぎりだったわね」

隣村についたのは日も暮れかけたころ。双子を連れているところを狼族に見られてたら面倒なことになってたわ。

双子はそこそこ大きな村に来るのは初めてらしく、きよろきよろとあたりを見回している。

「フィアとフィイは村に来るのは初めて？」

「狼は村とか集落とか作らないから、今日あの集落に行ったのが初めてなのー」

「のー」

「人がたくさんいるってことは、何か作戦でも実行するのー？」

「のー？」

うん、相変わらず弟はほとんど喋らない。にしても、作戦を実行するときしか人が集まらないなんて、この二人は一体どんな暮らしを送ってたんだ？

「でも、作戦とかで人が集まるようになったのは最近のことなのー」

「それまではみんな自分の思うままにやってたのー」

「それって、どのくらい前なんですか？」

「うーんとね、2、3週間くらいー」

「いー」

それを聞いた黒いのの眼がほんの少しだけ、視覚強化した私だから気がつくほど少しだけ、険しくなった。だがそれもすぐに消えて、もとの何も感情の無い眼に戻る。

……そういえばこいつ、眼に感情が浮かぶことって無いな。ふざけている時も、笑っている時も、怒っている時も眼だけは何も感情が浮かんでいない。唯一浮かぶのは私とあいつが対峙した時と、今日みたいに詰問（拷問か？）したときだけだな。

「師匠、もしかして何かまずいことでもあるんですか？」

「ううん、別に何もないわよ。ただ、ちょっと急がなきゃいけないかも。まあ、今日はもう移動するのは無理だと思うけど」

私は双子とリアに眼を向ける。何だかんだ言って、今日の強行移動は幼い体にはきつかったらしい。なんていったって、リアだってまだ12歳だしね。

「あ、そういえば、双子ちゃんは何歳なの？」

「12ですー」

「ですー」

嘘、このちびすけたちリアと同じ年か。この3人を並べてみると、リアって結構大きいほうだったんだな。私も黒いのもわりと背は高いほうだから、全然気がつかなかった。

「リア、良かったわね。貴方はもうチビじゃないわ」

「だからいつも言ってたじゃないですか！ 比べるものを間違えてたんですって！」

懐かしいな、トーマと一緒にリアをチビチビ言って追いかけてまわったのが。

「とりあえず、今日はこの村に泊るわよ。黒いの、どっか適当に宿屋探してきて。汚いこと高いところは嫌よ！」

「相変わらず貴女は人に何か頼むときに限って注文が多いですよねえ」

そうブツブツ文句を言いながらも黒いのは宿屋を探しに行った。

あいつのことだから5分ほどでいい宿屋を見つけてくるだろう。匂いか？ 匂いで分かるのか？ 無駄にそんな能力がある黒いのである。

「さてと、私たちは私たちが買い物しちゃうわよ」

「買い物？」

「物ー？」

「そうよ。あんたたちのその耳を隠す帽子とか、私たちについてくるならそれなりの服とか用意しなきゃいけないからね」

まだ日が完全に落ち切っていないから双子はちらちらと見られる

だけで済んでいるが、日が完全に落ちれば狼族のスパイだとか言つて村を叩き出されるだろう。いくら私たちがついていてもだ。

そして数分後、リアとフィイ、そして途中から合流した黒いのは地獄を見ることになる。

「見てみてフィア！ これ似あうんじゃない？」

「あ、それもカワイイのー！」

満面の笑みで露店を眺めて回る私とフィア。そしてその後ろを荷物を抱え、辟易した顔でついていく男性陣3人。しかし女性2人は気がつかない。

「セーラさん、この黒いのと緑の、どっちが似合いますかー？」

「うーん、フィアだったら緑かな？」

「じゃあ緑色にしますー！」

嬉しそうに緑色のマントを抱えて店主の元へと掛けていくフィア。やっぱり女の子だったんだな。

セーラというのは私の名前。10年前に捨てた名前の代わりに私が自分でつけた名前だ。もっともこの名前で呼んでいるのは現時点でフィアとフィイの2人だけだが。

「あのー、師匠？ そろそろ必要な物はそろったんじゃないんですか？ そろそろ宿屋に……」

「そうね、じゃあ……」

私の言葉に無言で顔を輝かせる男3人。そんなに嫌だったのか、買い物。その3人を見つめたままにやりと笑う。とたんに顔が凍りつく3人。

「じゃあ、今度は楽しいウィンドウショッピングと行きますか♪」

「「「……………」」」

「ホントですか？ やったー！」

無言で何かを諦めたような顔になる男3人と、両手を上げて無邪

気に喜ぶフィア。……でも、小さいフィイにこれ以上つき合わせるのは酷かな？

「でも、フィイは疲れたみたいだから黒いのと一緒に先に宿屋に行ってなさい。黒いの、宿屋の場所は？」

「ちよっと待ってください、師匠！ 僕は！？ 僕もフィイと同じ年なんですけど！ 僕もかなり疲れたんですけど！！！」

「あんたは私があんだけ鍛えたんだから平気でしょ。荷物持ちになりなさい」

「鬼——！！！」

「フィアちゃんもいるんですから、あんまり遅くならないでくださいね。リア、頑張ってください」

最後に本当に嬉しそうな顔で久々に笑った黒いのが半分眠っているフィイをおんぶして先に宿屋へ向かった。

「さーて、今日はいっぱい買うぞー」

「おー！」

「やめてください！」

そしてその日、満面の笑みを浮かべた私とフィア、そして疲れ切った顔で両手にに荷物を抱えたリアが宿屋に入ったのは日もすっかり落ちて、そろそろ黒いが探しに行こうかとしていたころだった。

女の子の楽しみ（後書き）

セーラ↓青蘭

本当は蘭で”ら”とは読みませんが、片仮名にしたときセーランはちよつと……というわけで、セーラとさせていただきました。

ちなみに何故師匠の二つ目の名前がセーラか分かりますか？ ヒン

トは元の名前です。

答えは次回のあとがきでも書きますかね。

追手（前書き）

暴力シーンはなるべくさらっと書いていききたいと思います。一応これ、戦闘モノじゃないんで。（↑今更）

作者は暴力反対です。（↑じゃあ書くな）

追手

翌朝、まだ日が昇りきっていない時間に私は起きだした。軽く壁をコツコツと叩いてから一緒に寝ているフィアを起こす。

「フィア、起きなさい。そろそろ行くわよ」

「ふわぁ。おはようございます……って、まだお外真っ暗ですよー」

まだ眠気が去っていないのか、少し舌ったらずなフィアが目をこすりながら抗議する。

「次の村がちょっと遠いから、少し早めに行くのよ。ほら、早く着替えて」

フィアを急かしながら支度を済ませ、まだ目をこすっているフィアを半ば引きずるように部屋を出る。

「遅いですよ。リアとフィイ君は先に村の出口に向かわせました。ここは僕が交渉するので先に行ってください」

「ありがと。さ、行くわよ、フィア」

宿屋を出ると、まだ眠いらしいフィアを背負って村の出口に向かって走り出す。……それにしてもこの子軽すぎじゃない？　今までちゃんとご飯食べてたのかしら。

村の出口近くの家の物陰に、膝を抱えて丸くなっているフィイと、その傍に立っているリアが見えた。やっぱりフィイのほうも眠かったらしい。

「あ、師匠。おはようございます。フィアちゃんもやっぱり駄目だったみたいです」

「まあ、まだ小さいから仕方ないわよ。もう少し寝かせてあげましょう」

「……僕も同い年なんですけど。ついでにもっと小さい頃叩き起されて目が覚めるまで虫とか持って追いかけまわされたんですけど」

「……あれは、うん、そう、訓練だから」

「まあ、おかげですぐに起きれるようになったのでいいですけど。主にトラウマで」

どうやら私は幼いころのリアの心にとてつもなく大きな傷跡を残していたようだ。ま、結果オーライ？

「よくないですよ。僕以降の子たちにそんなことしないでくださいよ。フィアちゃんとかフィイとか」

リアが私と双子の間に立ちふさがる。いい度胸してんじゃない。

「ふーん。僕以降……ね。じゃあ、リアはいいの？」

「え、ち、違っ！　そういう意味じゃなくて……！」

「いい加減貴女はリアをいじめるのやめてください」

「あら、黒いの。遅かったわね」

いつの間にか黒いのが呆れた顔で後ろに立っていた。黒いものにも気づかないなんて、私もちょっと度が過ぎたかしら。

「まったく貴女って人は。子供じゃないんですから、いい加減限度つてものを覚えてください」

「まったく。分かったわよ。相変わらずあんたは固いわね」

「誰のせいだと思ってるんですか、誰の」

「あー、何にも聞こえないー」

私は耳を押さえて顔を背ける。後ろで黒いのが貴女はガキですか、とか言ってるような気がするけど無視。

「じゃ、出発するわよ。黒いの、フィイを背負ってあげなさい。リアは全力で走れるわね。私はフィアを背負ってくから」

2人とも黙って首を縦に振ってこたえる。

私はフィアを背負うと、黒いのがフィイをきちんと背負ってスタンバイしているのを確認すると、指を3本立てて軽く振る。

腕を元に戻した瞬間から心の中でカウントを開始する。3……2

……1……。

0、と心の中でカウントするのと同時に地面を強く蹴って家の影から飛び出す。同じタイミングでリアと黒いのも飛び出しているはずだ。

ちゃんと付いてきているか気配だけで確認して前方に目を凝らす。
(10か。多いな)

走る速度は緩めないまま、腕を固定したまま指を1本立て、左右に10回振る。後ろの2人が同時にうなずくのが気配で分かる。

それを確認すると同時に、私はフィアを背負い直し、道のわきに続く森の中へ飛び込んだ。と同時にリアと黒いのもそれぞれ左右の森の中へと飛び込んだ。

「リア、あんたは黒いもののほうへ行きなさい。こっちは1人で大丈夫だから」

「分かりました」

私の後についてきたリアに一言だけ指示を出すと、私は目の前を凝視する。……こっちは女だと思って甘く見てるわね。4匹くらい軽いわ！

「————ッ！」

無言で気合いを入れて目の前に見えた1匹に飛び蹴りをお見舞いする。その間にも走る速度は落とさない。続く3匹も回し蹴りと飛び蹴りで沈める。

周りに残りがいないことを確認して道に戻る。遅れること数秒、黒いのとリアも道に戻ってきた。

「遅かったわね。あんたたちもまだまだね」

「うゝ、やっぱり師匠には敵わないです」

「それよりも黒いの、そっちはどうだった」

「貴女の読み通り、全員狼です。たぶん昨日の夜から街の外に張ってた奴らと同じです」

「で、宿にいた奴らは？」

「全員沈めて村の広場に置いてきました。朝になれば村の人たちが気がついて何とかしてくれるでしょう」

「「？」」

私と黒いものの背中ではようやく起きたらしい双子が双方訳が分からない、といった顔できょとんとしていた。

「これは私の推測だけど、さっき沈めた奴らはあんたたちの次の作戦実行部隊よ。昨日の夜から村の外と宿屋に張ってたから早めに出てきたってわけ」

「多分この先、まだ追手は来ると考えたほうがいいでしょうね」

「仕方ないわよ。あいつは昔っからしつこい奴だったから」

小さいころの記憶なんてとくに捨てたくせに、とか何とか黒いのが言っていたような気がするが、たぶん気のせいだろう。

私たちはだんだん明るくなってきた道をただひたすら次の村を目指して駆けていた。

追手（後書き）

これは暴力ではありません。アクションです。きっと。
グロイシーンとかは絶対に書かないようにしているので、もし何か
気がついたことがあれば、感想でお願いします。

道の途中（前書き）

年下組は可哀想です。

道の途中

「そろそろいいかしらね」

そう言って私はフル回転させていた足をとめた。それにならってリアと黒いのも足を止める。

私はもちろん息ひとつ乱れていないが、黒いのとリアの息はかなり上がっていた。

「何よ、あんたたち。だらしないわね」

「ゼエ、ハア……。貴女は相変わらず化け物ですね……。フウ……。黒いのの息はだいぶ整ってきたようだ。それに比べてリアは、

「ハア、ハア……。な、んで…フウ、ふた、りは……。平気、何ですか……」

「男の子のくせにだらしないわね。特にリアは誰も背負ってないでしょ」

「だからって、8時間連続走破って、……。フウ、ヒドイじゃないですか」

追手を振りきったのがだいたい午前3時くらいだから、今は日も高くまで昇り、もうすぐ昼時になる。

「ったく。帰ったらしごき直してやるわ」

「そんなあ」

私は止めていた足をまた動かし始めた。いつまでもこんなところで立ち止まっているわけにはいかない。

「だいぶ息も整ったでしょ。行くわよ。早くしないと日暮れ前に村につかない」

「それもそうですね。さ、リア、行きますよ」

「えっと、ミカゲ？ 僕降りて自分で歩くよー？」

ミカゲの背中であっぴりと眠っていたらしいフィイが元気いっぱいになったらしく、降りる降りると騒いでいる。

「だ、そうですよ。背中空くのでおんぶしてあげましょうか？ リ

ア」

「結構です!!」

明らかに楽しそうな顔をした黒いのと、顔を真っ赤にするリア。いちいちそんな反応をするからみんなに遊ばれるのだということにいい加減気づかないもんなのかな。

「フィイが降りるなら、フィアも降りますー」

フィアもそう言い出したので、降ろしてやった。

地面に着地すると、フィアは私に向かって深く頭を下げた。

「セーラさん、ありがとうございます、でしたー」

「いいのよ、お礼なんて。それにフィアはすっごく軽かったから全然辛くなかったよ」

「でも、ありがとう、なんです。フィイもお礼言った？」

「ミカゲさん、ありがとうございます」

「僕もお礼なんて要りませんよ。年上としては当然のことですから」
「年上なら、当然、ですか……」

リアが珍しく拗ねている。1人だけそっぽ向いている。顔を90度とちよっとくらいひねって歩いてるのによく転ばないな。

「あ、つぶな」

あ、転びかけた。でもさすがの運動神経でリアは転ぶ直前に体勢を立て直した。さすが私が鍛えただけあって体のバランス感覚と反射神経は素晴らしいわね。

「リアの課題はあと体力かぁ。また追いかけます？」

「遠慮します。体力はしょうがないですよ。僕はまだ成長期ですから」

「あれ、僕がリアくらいのときはもう12時間連続走破とか余裕でしたよ」

「ああ、そうだったわね。黒いのは昔から武芸に関しては天才だったわ」

「まあ、そうは言っても貴女に勝てたことなんて結局1度もありませんでしたけどね」

黒いのに関しては確かに私が教え始めたころからもう天才的だった。ほんの数カ月でトーマと並んでしまったほどだ。でもトーマもそこら辺にいるようなレベルではないので、黒いの相手に引けを取ったことは1度もないが。

「リアは帰ったら1日50キロ走ること。帰ればしばらく私も道場に入れると思うからチビたちの相手は私がするわ。……あ、トーマに任せてもいいのか。どっちにしろあんたは自分の修行に専念しなさい」

「5、50キロ……。分かりました」

今までリアは連続走破30キロまでしかしたことがない。いきなりハードルが上がってビビってるんだろう。

「なあに、ビビってるの？」

「そ、そんなことないですよ」

「ね、セーラさん、道場ってなんですか？」

「かー？」

どうやら双子を放っておいて3人だけで盛り上がってしまったらしい。反省反省。

「道場っていうのはね、私が武道を教えるところよ。こう見えても私、師匠なのよ」

自慢げに耳をぴくぴくと動かした。

双子は目をキラキラと輝かせて喰いついてきた。

「セーラさん、オシシヨー様なんですね！」

「強いんだー！」

「フィアたちも教わりたいですよー！」

「すー！」

私はあごに手を添えて考える。確かに今は私たちが守ってあげられているけど、これから先ずっと守っていられるとは限らない。自分の身は自分で守れることにこしたことは無いだろう。

「分かったわ。これから先何が起こるか分からないし、自分の身くらい守れたほうがいいわよね」

「やったー！」

「たー！」

私の周りをぴよんぴよん跳ねながら喜びを表す2人。その2人をリアと黒いものの2人が微笑ましげに見ていた。……リア、お前は同い年だろう。

「そうね、でもあんまり時間はないし、村の外で教えるのは今はちよっと危険ね」

「なら、各村で一泊ずつして、1日ずつ教えればいいじゃないですか。1日は移動、もう1日は稽古。それでどうですか？」

「ナイスアイディアよ、黒いの。双子もそれでいい？」

「「らじゃーです！」」

双子が可愛らしくそろって敬礼する。

こうやって並べてみると、この双子がすっごく似ていることに気がつく。もしかしたら、ファイアが髪切って短くなったらどちらがファイアでファイイなのか分からないかもしれない。

「そうと決まれば、次の村まで走るわよー！」

「え、また走るんですか！？」

情けない声を上げるリアは無視して私と黒いのはそれぞれファイアとファイイを抱き上げる。

2人で目配せしてほぼ同時に走り始める。

「そんな、ちよっと待ってくださいよ。ミカゲさん、師匠ったら！」

足は早いが持久力がないリア君は、結局1人だけ村に遅れて着きましたとさ。

道の途中（後書き）

誤字脱字、または文章の流れ的におかしい、前までと言葉遣い、呼び方が違う（今まで僕だったのに俺になっている）など、何か気づいた点がありましたら、お知らせください。

作者もたまに読み返して見つけ次第直していますが、1人じゃ限界があります（泣

皆様のご協力、お願いします☆

素直な気持ち（前書き）

たぶんこの辺で折り返し地点かな、なんて思っています。
師匠たちは何処まで行くんでしょかね。

素直な気持ち

「遅いわよ、リア」

結局リアが街に着いたのは日も暮れかかったころだった。手を膝について肩を大きく上下させ、必死に息を整えているリアは、顔を上げるのもしんどいらしく下に向けたまま反論した。

「し、師匠たちが早すぎるんですよ。何時着いたんですか」

「そうねー、お昼ごろかしら」

「早っ!？」

リアが一瞬呼吸するのも忘れて驚きの声を上げた。当然、直後にむせたように咳を繰り返す。息乱したまま呼吸止めて声上げるからだぞ。

「大丈夫ですか？ちゃんと持久力つけないきゃだめですよ」

腹を抱えて笑っているだけの私とは違って、黒いのはリアの背中をさすってやりながら言う。

「うう、頑張ります……」

「……何よ、リア。黒いのが相手だと随分と素直じゃない」

「人柄、の問題でしょうか？」

「黒いのは黙ってなさい!!」

睨みつける私と平然とその視線を受ける黒いの。

「喧嘩はダメですー」

「すー」

と双子に割り込まれた。とたんに私の相好は崩れる。こんな可愛い子たちを間に挟んで喧嘩なんかできるわけじゃないじゃない。

「……貴女は相変わらず子供好きですねえ」

黒いのにため息をつかれるが無視。可愛いものは可愛いのだ!

「とりあえず、リアが来る前に黒いのが宿見つけてくれたから、そっちに移動しましょう。入口で騒いで悪目立ちするのもあんまり良くないしね」

というわけで、私たちは一斉にぞろぞろと宿屋へと移動する。そのほうが目立つって？ そんなの知らないわよ。

黒いのが見つけてきた宿屋はそこそこ大きくて、さまざまなおネコが入り乱れている。

一番の魅力はその庭で、かなりの大きさを有している。これだけの広さがあれば、早朝でも他のネコにあんまり迷惑をかけずにチビたちの修行ができるわ。

双子は着いた途端、目を輝かせて庭へと走り去って行った。それを微笑ましげな顔で見送る3人。

「あら、リアは一緒に行かなくていいの？」

「こんなときだけ同じ年齢で扱うのはやめてください！！」

「遠慮しなくてもいいんですよ、リア。そのためにこの宿を探したんですから」

「ミカゲさんまで！？」

すっかり落ち込んでしまったリアをその場に置いて、私たちは宿屋の中へと入って行く。

入口のところでふと思ったって、振り返る。

「リアー、双子の面倒よろしくね！」

「えー！？」

さらに拗ねてしまったリアを黒いのと2人でニヤニヤしながら眺める。お前も相変わらず意地が悪いな。

宿屋に入り、黒いのが確保した庭に面した部屋へ移動する。窓を開けて外の様子をうかがうと、ちょうど双子がリアに駆け寄って行くところが見えた。

何だかんだ言って、リアも同じ年の子供が旅に加わって嬉しいのだろう、笑顔で双子を迎えていた。

「目の保養だわ」

「貴女は何を気持ち悪いこと言っているんですか」

「気持ち悪いとは失礼ね。事実じゃない」

「……………（ハア）」

何か思いつきり軽蔑の目を向けられたけど、気にしない。私は強い子！

「とりあえず、今後のことだけ確認しましょうか」

黒いのが私の正面に回り込んで座った。その真剣な顔を見て私の表情も自然と引き締まる。

「とりあえず、報告を先に。リアが遅れた理由は貴女も分かっていますね？」

黒いのの問いかけに、私は即座に首を縦に振る。

いくら体力がないとはいえ、リアは私の弟子だ。半日近くも送れるわけがない。

ならなぜ遅れたのか。理由は簡単。襲われたのだ。

時間的には私たちがちょうど村に着いたところ。私の目にはぼつちり見えていた。この目ってけっこう便利よね。

「多分そいつらが狼の第3部隊と考えていいでしょう。匂いではすでに村に第4部隊が紛れ込んでます」

「あいつもだいぶ本気ね。ここまでしつこいと逆にあきらめるわ」

「で、あの3人はどうするんですか？ まさか最後までは連れていきませんよね」

「……そのつもりだけど」

「貴女って人は……！」

思いつきり黒いのにため息をつかれた。

「貴女はあの人にリアたちを会わせるつもりですか！？ あんな危険な人に！」

「落ちつけ、黒いの。会わせるとは言ってない。そのために黒いの、お前を連れてきてる」

「僕を？ ……まさか！？」

「あいつには私1人で会いに行く。3人を頼んだわよ。リアもいるし、あんたと2人でなら私が戻るまで双子を守れるでしょ」

「それはダメです！」

めったに言葉を荒げるところか興奮することが無い黒いのが、珍

しく興奮している。というか初めてみたぞ。

「何のために僕が貴女についてきたと思ってるんですか。少しくらいは僕を頼ってください」

「十分頼ってるわよ。信頼してなきゃあの3人を任せるなんてできないわ」

まだ何かを言いたそうな黒いのを目で制して、私は視線を外に向ける。あの子は耳がいいから全部聞こえちゃったかな？

「東の森まではあと5日で行くわ。次の村で一緒にいるのは最後よ。その村であの子たちを守ってちょうだい」

黙っている黒いのの肩に手を伸ばし、ポンポンと軽く2回たたく。そして立ち上がると私は外に向かった。

「絶対に、帰ってきてください」

すれ違いざまに軽く服の裾を引っ張って、黒いのが小さく囁いた。それに私は軽く微笑んで応え、そのまま外に出た。

「当然よ」

たまには可愛いこともするのね、なんてことを考えながら、笑みを抑えきることができていない頬を手で押さえながら、私はチビたちを呼び戻すため、日も落ちてだいぶ暗くなった外へと足を踏み出した。

素直な気持ち（後書き）

なんか、フラグたちました。

師匠は大丈夫なんでしょうかね。作者にも分かりません。そろそろお兄さんのほうも本格的に動き出す頃でしょうか。

修行と驚き（前書き）

双子ちゃんの意外な一面。

作者もびっくりしました。何故そんなものを隠し持ってた！？
リア君は安定の可哀想なポジションです。

修行と驚き

翌日の朝、宿の庭からは元気な声が聞こえてきていた。

「うわぁ！　すごいですー！」

「すー！」

歓声を上げているのは双子のフィアとフィィ。そして元気に悲鳴を上げているのが、

「師匠！　何で僕まで！？　ちよつとは手加減……って、うわ！」
リアだった。

「何よ、リア。私はまだまだ本気なんか出してないわよ。ほら、頑張らないと双子ちゃんに呆れられちゃうわよ」

「そんなこと言ったって！　っと、ハッ！」

リアが気合いと同時に右足の低い蹴りを入れてきた。私はギリギリのところまで一步下がってスルリとかわす。先ほどから攻撃がかすりもしないことに、早くもリアは涙目になってきている。

「ほーら、リア。さっきから一度も当たってないわよ。よく私の動きを見なさーい」

「もう！　いじめですよ、これ！」

今度は左から回し蹴り。これも軽くステップを踏んだだけでかわす。

「もうやだ」

すっかり戦意を喪失してしまったリアは、動きを止めてしまう。

そのままその場にしゃがみこんでのの字を書き始める。

「じゃ、次は双子ちゃん達もやってみましょうか。さっきのリアみたいにはやらなくてもいいから、とりあえずフィアは私、フィィは黒いのと組み手にしましょうか」

「え、僕もですか？　貴女一人で十分対応できますよね」

「あんた師範代から逃げたでしょ。その代わりだと思ってやっとなさい。それとも何、私と組み手がやりたいのかしら？」

「謹んでご遠慮させていただきます」

素直でよろしい。

早速私とフィアは向き合おうと、一礼した。これはマナーね。

「じゃ、どっからでもいいわよ。うまくやろうとしなくていいから」
「はいです！　じゃあ、遠慮なくいきますー」

と、フィアがそういうと同時に腰を低くすると、思いつきり地面をかけた。結構なスピードで突っ込んでくる。……これは真剣に相手しないどっちかが怪我する。

隣の様子を見ると、フィイも同じようなもので、若干表情を引き締めている黒いのが見えた。

「ねえ、フィア？　もしかしてどっかで格闘技とか習ってた？」

「うんと、そうですね。この前の作戦に参加する2週間前くらいに一通り教わりましたー」

「ましたー」

律儀に反応するフィイ。双子パワー、恐るべし。……にしても2週間でこのレベルか。この子たち、実は天才なんじゃないの？

そんなことを考えながら相手をしていると、先ほどまでうずくまっていたリアが急に立ち上がって、すたすたと宿の中に入っていた。た。

「ちょっと水飲みに行ってきますね」

入り口のドアからひょっこり顔だけ出してそういうと、今度こそ中へと消えた。

「あの子は耳いいからね」

「まったく、本当にそうですよ」

リアのように周りの音が鮮明に聞き取ることができない分、私と黒いのは気配を読む力を鍛えている。中には気配を消すことができる人もいる（例…師匠）ので万能というわけではないが、だいたいの人数、種族程度なら分かる。

「どうします？　中断しますか？」

フィイの蹴りを受け流しながら黒いのが尋ねてくる。

「うーん、リア一人でも大丈夫じゃない？」

私もフィアの蹴りからの裏拳を身をよじってかわしながら答える。

「よし、終わり！！」

私の合図で動きをピタリと止めるフィアとフィィ。その様子を見て私の背中に嫌な汗が流れる。

2人は私たちと出会う前に2週間だけ訓練を受けたと言った。しかし、そんな短い期間で動きをピタリと止められるようになるのはほぼありえない。だいたいこの年の子供というのは、合図があっても夢中になっていたりして動きを止められないものだ。現にリアでも止められるようになるまで1ヶ月はかかった。

それをたった半分の2週間で。

動きのほうも半端ではない。少なくとも1年は毎日休まず稽古を続けなければならぬだろう。

「……あんたは一体どんな子供を仕込んでんのよ」

私の呟きが少し聞こえたらしく、フィアが不思議そうな顔で私を見上げてくる。そのフィアに何でもないよ、というように軽く首を横に振ってみせ、宿のほうへと視線を向ける。ちょうどリアが戻ってくるころだった。

「遅いわよ。いったいどんだけ水飲んできたのよ」

「すいません。思ったより多くコップに注いじゃって、飲みきるのに時間かかったちゃいました」

「ちゃんと後片付けしてきた？」

「はい。それはきちんと」

上出来だ。やっぱり弟子が優秀だと師匠は楽でいいわ。鍛えた甲斐があったわね。

「じゃ、双子ちゃんの実力も分かったことだし、今日の稽古はここまでにしましょうか」

「えー、なんか師匠、フィィとフィアには甘くないですか」

「この子たちにはこれ以上訓練は必要ないわよ。それとも私の判断には不満？」

「そういうわけじゃないですけど」

「なら黙ってなさい」

嫌な汗をかくほどの実力だったのは秘密だ。これならこの先私がいなくてもリアと黒いのの足を引っ張ることはないだろう。

「そうと決まったら今日は一日ゆっくり休んで、明日には出発するわよ。リア、黒いの。あんたらは何とかして稼いできなさい」

「またですか……」

「……………」

いくら節約しようとも、宿やら食べ物やらで金は必要になってくる。さらに今回は人数も増えているので、今のうちに稼いでおいたほうがいいだろう。ちなみに私は何もしない。弟子任せ。

しぶしぶ宿を出ていくリアと黒いのを見送って、私は部屋のベッドにダイブする。稽古つけた後のこのベッドがたまらなく気持ちいいんだあ。

ちらりと脇を見ると、同じように双子ちゃんもダイブしている。

うん、そうだね。気持ちいいよね。

今日は朝早くから起きていたせいか、しばらく見守っていると双子ちゃんはすやすやと眠り始めた。私も規則正しい寝息を聞きながら、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

夕方に帰ってきたらしいリアと黒いのに大量の殺気を浴びさせられ、飛び起きたのはまた別の話。

修行と驚き（後書き）

次回、突入！！

え、しない？　しないの？

師匠「だってめんどいもん」

話進まないから！！　お願いします。動いてください。

……それと、リアの「水飲んでくる」の意味、分かりました？　分
かりましたよね。水⇨敵、飲む⇨倒すです。

前夜

翌朝、まだ日が昇りきっていない時間に動く5つの影があった。もちろん、私たちだ。

「今日はちよつと遠いけど、今日中に隣村まで行くわよ。いいわね」
一斉にうなづく4人。それを確認すると、私は隣村に向かって走り出す。

隣村に着いたところにはもう日が沈みかけていた。道中特に襲撃もなく、逆に私たちの警戒は強くなっていた。

「ったく、あいつも相変わらず酷い心理戦しかけてくるわよね」

「本当にそうですね。ここまで警戒して何もないと、精神的疲労もかなりのものになりますし」

あいつを知らないリアと双子はキョトンとしている。

「ま、何もないわけがないんだけどね。たぶんあいつはこの森にいるはずだから」

「その、あいつ、というのは師匠の何なんですか？」

リアがちよつと聞きにくそうに尋ねてきた。

「……兄よ。認めたくはないけど」

「師匠の、お兄さん……？」

初めて聞いたリアはとても驚いた。そもそも私に兄がいたことすら知らないのだ。当然の反応だろう。

双子もかなり驚いたらしく、フリーズしている。まさか自分たちに襲うように指示したトップが、自分たちが襲った人の兄だったとは思ひもなかっただろう。

「ま、誰であろうと近日中にけりをつけるわ。距離的にも近いわけだしね」

「……師匠。絶対に、1人で行こうとかしないでくださいね」

「……………」

「……ハア。やっぱり。僕も何年弟子をやっているとってんですか。それくらい分かります」

何でこう私の弟子たちはそろいもそろってこう察しがいいのかしら。ちよつと鍛えすぎ？ でもこればかりは譲れない。リアたちが私を一人で行かせたくない、と思うように、私もリアたちを連れていきたくないという思いがあるからだ。

「あんたちは連れて行けない。ここに残ってなさい」

「何ですか!？ 僕たちはそんなにも足手まといですか!？」

「そうじゃない!!」

珍しく怒鳴った私に、一瞬、部屋が静かになる。ハツとして4人の顔を見ると、そこには今にも泣きそうな顔をしたリア、ただ静かに私の言葉を待つ黒いの、訳が分からないなりに心配そうな顔をするフィアとフィイがいた。

「嫌なのよ。自分の面倒事に他人を巻き込むのが。10年前につけきれなかった決着のせいで誰かが傷つくのなんて、見たくない」

「師匠……」

「分かったら私を1人で行かせて。もうこれ以上私のせいで傷つく人は見たくない」

私の両親のように、誰かを死なせたくはない。これ以上、兄に人を殺め^{あや}させたくない。それが唯一残された肉親に、唯一私ができることだから。

「黒いの、リア。フィアとフィイを頼むわよ」

まだ泣きそうな顔をしていたが、リアはもう何も言わず、しっかりとうなずいた。黒いのも同様にうなずく。

私はしゃがみこんでフィアとフィイに視線を合わせると、ゆつくりと語りかけた。

「私が面倒みるって言ったのに、こんなところで放り出してごめん。でもちゃんと戻ってくるから。それまであの2人と一緒にいてくれ

る？」

「フィア、セーラさんのこと、ずっと待ってますー」

「フィイもー」

「うん。ありがとう」

双子がにっこりと笑うのを見て、私は立ち上がる。

「さすがに夜から森に入るのは危険だから、明日日が昇ったら入るわ。それまでに買い物済ませちゃうわよ！」

「また買い物ですか」

そう言っただけでリアが笑った。その目元に光るものが見えたが、私は見なかったふりをした。

「そうよ。昨日リアと黒いのが稼いでくれたから、久々に甘いものでも買っちゃおうかしら」

「甘いものですか!？」

すかさず反応したのはフィアで、こんなところは女同士通じ合うものがある。

「よし、行くわよ！」

「おー！」

「おー！」

私の掛け声に元気よく応えたのはフィアとフィイ。リアと黒いのはやれやれ、といった風に私たちを見ていた。

明日、单身森に乗り込む。そのことを考えると気が重くなるが、努めて明るくふるまった。

「……大分遠くまで来ちゃったな。まったく、誰かさんのせいで楽しい旅も、かたっ苦しいことこの上ないわ」

小さく愚痴っていると、目ざとい黒いのが視線だけで問いかけてきた。私はそれに首をすくめて答えると、さっそく街へと繰り出していった。

再会と初対面（前書き）

お兄ちゃん、登場！

そして、師匠突入！

師「お兄ちゃん、その女誰！？」

兄「すまない、俺はこいつが好……」続きはWEBで♪」

……嘘です。

再会と初対面

太陽が昇りかけるころ、私は一人ごそごとベッドを抜け出す。着替えを手早く済ませて持ち物を確認する。

一通り準備を済ませた後、最後の仕上げとばかりに10年前にもらった短剣を腰に差す。10年前の決着をつけるなら、これは必要不可欠なものだろう。

「じゃ、行ってきます」

一緒の部屋で寝ていたフィアの頭をなでる。ぐっすりと眠ったフィアは起きる気配もない。

私はその様子にくすりと笑うと、静かにドアを開けて部屋を出る。「随分と早いわね？」

「大丈夫です、ひきとめたりはしません。ただのお見送りです」

「師匠、気をつけてくださいね」

ドアを開けると、そこには黒いのとリアがいた。黒いのは笑顔で、リアは半分涙目で、それぞれお見送りの言葉を言ってくれる。

私は二人の頭をそれぞれガシガシとやると、黒いのは少し迷惑そうな顔、リアは嬉しそうな顔をする。

「無事に帰ってくるから、チビたちを頼むわよ！ あ、リアもチビだったか」

「チビは余計です!!」

そこは間髪いれずに噛みついてくるか。よしよし、元気だな。

「うし、じゃあ行ってくるわ。あとよろしくね」

そう言って、私は宿屋を出た。

……あ、フィイの顔見てくるの忘れた。

「……何なの、この禍々しい気配は。一体何が巢食ってるっていう

のよ」

私は必死に以前ここを訪れたころの様子を思い出していた。見た目は変わりない。それは断言できる。けれどそこに渦巻く空気というものが酷く濁っていた。

「これじゃあ、何にも住めないわね」

鳥や虫たちも逃げ出してしまったのか、辺りには時々風が木々の葉を揺らす音しか聞こえない。つまり、無音。

「入りたくない……」

けれど入らなくては何も始まらないので、嫌々森の中へと足を進める。

枝を踏んだり揺らしては笑えないので、慎重に足を進めていく。ここは森の中だから気をつけなきゃいけないものはいっぱいあって、すぐく神経が疲れる。

森に入ってから3時間も経っただろうか、前方に広場のようなものが見えてきた。その手前50mほどのところで立ち止まる。私はそのぐらい遠くても余裕で見える。目がいいからね。

「あれは、あいつ？ その傍にるのは……」

広場の一番奥、土が一段盛り上がったところに、あいつ、兄と見たことがない女の人がいた。

広場のこちら側には一目で狼族と分かる者たちが適当に座ってうつろいでいるのが見えた。普段群れることがなく、一目で”黒ネコ族”と分かるあいつが目の前にいるのにくつろいでいるその光景が、私にはとてもおかしなものに見えた。

私がじっと観察していると、ふとあいつが立ちあがって狼族のやつらに声をかけ始めた。……ばれたか？

私が冷や汗をかきながら一層息をひそめていると、あいつはどうやら狼族の奴らを並べているみたいだった。しかし、普段群れない奴らがよくこんなにもきれいに整列できるもんだな。

あいつは狼族を、真ん中に通路を作るかのように広めに間を開けて並べさせると、自分はまた奥の女の人の背後に控えるように立つ

た。

「さて、みなさん。今日はいいい天気ですね」

急に女の人が喋りだした。その声は50m離れている私にもはっきりと聞き取れるほどよく通り、高すぎず、低すぎない聞いているとても心地いい声だった。

しかし、あの人は一体誰なんだろう。パッと見た感じ、ネコでも狼でもない。初めてみるタイプだ。

その時私は気付いていなかった。その女の人の目が、はっきりと私を捉えていたことに。

「今日はですね、うふふ。いい天気の日にはぴったりの、素敵なお客様が来てますよ」

「え」

気がつくと、私はその広場にいる全員と目が合ってしまった。

「あ、あはは。どうも、こんにちは」

もう笑うしかない。あいつが近づいてくるのをただ呆然とその場で見ていた。逃げようにも足が動かない。

「彼女は彼の妹さんなんですよ」

私が女の人の隣に連れてこられると、そう紹介された。彼とはあいつのことだろう。

一斉に集まる好奇の視線。隣を見ると無表情のあいつがいた。

「じゃ、あたしの目標は達成されたので、しばらく用はありません。帰っていいですよ」

女の人のその言葉に、素直に立ち去っていく狼族たち。何者なんだ、この人は。

狼族が全員立ち去ると、女の人は私に向き直って改めて口を開いた。

「改めまして。初めまして、カランさん。あ、今はセーラさんでしたっけ？ あたしはルーパス」

「ルーパス……？」

どこかで聞いたことのあるような名前だった。一体どこで？ 思

い出せ、今すぐ思い出せ！

「多分、族長の書斎の本であたしの名前を見たんじゃないかしら？
リュウセイもそこで知った、って言っていましたし」

私の表情からよんだのか、さらりとループスさんが答えを教えてくださいました。って、何私はほのぼのと会話してんだ！？

「まあ、すぐに気がつかないのはしょうがないですよ。もともと男の名前ですし。ね、リュウセイ」

黙ってうなずくあいつ。こいつってこんなに無口な奴だったわけ？
つい1週間ほど前に会ったときとは大違いの口数の少なさだ。
やばい、こいつをのしに來たのにだんだん心配になってきた……。

「彼の心配よりも、自分の心配をしたほうがいいんじゃないですか？」

「自分の心配って……きゃっ」

見事にループスさんに足払いをきめられて地面に倒れこむと同時に、上から押さえつけられる。のんびりと会話していた私がうかつだった。

「敵地のど真ん中で油断なんかしてちゃダメですよ？」

……ごもつともです。私はどうやってこの状況から切り抜けようか、必死で頭を働かせていた。が、次にループスさんの口から出てきた言葉に、私はそのまま固まった。

「その身体、お借りしますね？」

再会と初対面（後書き）

ルーパス何者！？

次回、過去の裏話。

真実（前書き）

いける。いけると思ったんだよお（泣
これを読んでくださった友人の皆様が、

「これはなぜ残酷描写の警告が無い!？」

と寄ってたかって苛めるんです（笑

さすがにこの回からはアウトだろうという作者の自己判断（自重ともいう）により今回から残酷描写ありの警告を入れさせていただき
ました。

内容的にはほぼ変わりません（たぶん）ので今まで同様楽しんでいただけると幸いです♪

真実

「身体を……借りる？」

「そうよ。あたし、こう見えても霊体なんですよ？　それで、このリュウセイに協力してもらっているわけです」

この目の前でしっかりと実態を持っている人が霊体？　そんなわけあるはずが……。

「カラン、俺が1週間前に言ったこと、覚えてるか？」

今までずっと黙っていたあいつが急に口を開いた。1週間前……、北の森であいつに会った時か？　確か強くなった私が必要とかどうとか言ってたな。

「始まりは10年前。俺がこの人に出会ったときからだ」

そう言って、あいつが静かに語りだしたのは、10年と少し前。私の7歳の儀式の前の出来事だった。

「坊や、どうしてここに来たの？」

「何か嫌な気配を感じた。あんたが僕の父上や母上、妹や族民たちを傷つけるような奴だったら容赦はしない」

僕はそう言って3年ほど前に父上から頂いた短剣を構えた。本来この短剣は人を殺めるためのものではないが、まだ幼い僕にはこれしかなかった。

「あらあら、坊やはあたし相手に随分と気が強いよね。気にいったわ」

「僕はお前に気にいられる筋合いなど無い！」

「うふふ。200年ぶりだから、坊やみたいに小さい子があたしのこと知らなくても当たり前ね。もっともあたし、200年前は男だったけど」

突然、目の前にいる女が怖くなった。200年前。以前は男。その単語が頭の中でぐるぐるする。どこか、どこかで僕はその単語を目にしている。その正体を知っている。

「あら、坊やは頭もいいみたいね。あたし、賢い子は好きよ」

目の前にいるのは何の武装もしていない、非力な女のはずで、僕のほうは短剣を持っている。それなのに僕はこの女の目の前に立っていることにすら恐怖を覚える。

「いい、坊や。あたしの名前はループス。」 神狼ループス「よ」

「あ……」

思い出した。”神狼ループス”。それは狼族の實在する神であり、もっとも残酷で残虐な神。その身体は200年前にこの北の森の”母なる洞窟”に封印されたと、父上の書斎にあった本には書かれていた。

「ちよつとごめんなさい」

すぐ近くでしたその声にハツとして意識を前に戻すと、至近距離にループスの顔が見えた。

「痛っ——！」

一瞬痛みが走った右腕を見ると、一本の赤い傷が手首から肘のあたりまで走っていた。また視線を前に戻すと、そこには赤い液体を手につけ、それを舐めとっているループスがいた。

「お前、族長の息子か……！ ついさっき目覚めたばかりだと言うのに、なんて運がいいんでしょう！ お前、名は何と言う？」

「……リュウセイ」

「うふふ、いい子ね」

ループスはもう一度僕に、今度はゆっくり近づくと、頭を優しく撫でた。頭が撫でられたところからぼーっとする。

「そう、明日妹の7歳の儀式なの。それで、あの洞窟で儀式を行うのね。そこには族長たちも揃う……」

何でそんなこと、この人が知っているんだろう。そう思っていたら、急に僕の声が聞こえてびっくりした。どうやら僕が全て喋って

しまったらしい。

「いい、リュウセイ。貴方はもうあたしのもの。あたしの言うことしか聞かない」

僕、何かいけないこと喋っちゃったような気がする。でもさっきから頭がぼーっとして、ループスは何言っているのかもよく分からない。

「リュウセイ、よく聞いて。あたしはここに200年も閉じ込めた貴方の先祖が憎い。できれば復讐したいわ。でもね、今のあたしにはそれができないの。何で分かる？」

父上、母上、カラン。ごめんなさい。

「あたしが力を発揮するためにはこの族長の存在が邪魔なの。いくらこの200年で族長の力が衰えたといっても、200年前にあたしを封印した者の末裔だから。だからね……」

もう眠い。このままここで寝たら、僕はこの人に殺されちゃうのかな。

—————貴方の家族を全員殺しなさい—————

カランだけは守らなくちゃ。僕の大切な妹。

そこで僕の意識は途切れた。

真実（後書き）

お兄ちゃん、そんな過去があつたなんて……！
これからお兄ちゃん大活躍（の予定）です☆
頑張れお兄ちゃん！

愛憎

「何よそれ、聞いてないわ。そんな、じゃあ私が今まで生きてこれたのは……」

「そ。貴女のお兄さんのおかげですよ」

その言葉は私の10年間持ち続けたあいつへの恨みを否定するもの。私の存在の根底にあるものを否定するもの。

「1番憎いと思ってた奴に私は生かされてたの？」

屈辱。

この2文字だけが私の頭に浮かんた。まさか自分がいつか倒すと息巻いていた奴に生かされていたなんて思いもしない。私の10年分の恨みはどこへ向ければいいの？

「……あの時私も一緒に殺してくればよかったのに！」

そうすればこんなに辛い思いをしなくても済んだ。10年もかけてやっと唯一の肉親を倒す決意が固まったのに、その決意を簡単に粉々にされ無くて済んだ。

混乱する私を、あいつはただ淡々と、だけどどこか悲しそうに黙って見つめ続けた。

「そんなこと言わないであげてください。リュウセイは私の暗示を自力で解いてまで貴女を救ったんですよ？　いくら力が本調子に戻っていなかったとはいえ」

「暗示？　自力で？　……兄様、それはどういう意味ですか？」

「……やっと同じように呼んでくれたな。意味はそのまんまの意味だよ」

私はハッとして口元を押さえた。混乱しすぎて昔の呼び名が出てしまったらしい。羞恥で頬が赤く染まる。

そんな私をルーパスさんはニヤニヤと、あいつは少しだけ嬉しそ

うに見つめていた。

「兄妹仲よろしく話しているところで悪いのですが、あたしの話もしていいですか？」

ループスさんのその一言であいつが黙る。必然的に私も黙ることになる。ちよつと癪に障るが。

「ホントは身体を借りるだけならリュウセイでもよかったんですけど、今あたしは女性の姿をとっているわけです。男性の身体って合わないんですね。この前もちよつとリュウセイで試してみたんですけど、結局リュウセイの身体のほうがもたなくて……」

そこでループスさんが私に体重をさらにかけた。思わず息が詰まる。

ループスさんが私の顎を掴み、無理やり自分のほうを向かせる。私と目が合うと不気味に笑った。私の背中にゾクリと悪寒が走る。

「受け入れる。あたしの存在を。あたしの意志に服従を誓い、その身体を差し出せ」

決して脅している口調ではない。ただ淡々と用件を述べている。それだけのはずなのに、思わず自分の全てを投げ出してしまいたくなるような、鋭い威圧感。

この時初めて私は、相手は自分では到底及びもしない存在なのだと思います。知った。

「……これくらいにしておいてください」

意外にもループスさんを止めたのはリュウセイだった。

「これ以上はカランの身体がもちません。折角見つけたものを早々に壊すつもりですか」

「それもそうですね。ではまた今度にします。気をつけてお帰りください」

そう言つてループスさんはあっさりと私から身体を離すと、そのままどこかへ消えてしまった。

私があっけにとられてその後ろ姿を見つめていると、リュウセイもその後へとついていった。

「兄様！」

私がそう呼び掛けると、リュウセイはその場に立ち止まって、ゆっくりと振り返った。その顔は何も感情を映しておらず、私はその顔に寒気を感じた。

震えだしそうになる身体を叱咤し、身体を起こしながら私は問うた。

「兄様、私はもう1度あなたに近づいてもいいの？」

すると、リュウセイは少しも悩んだそぶりを見せずに口を開いた。

「否」

それだけ言って、リュウセイは私に背を向けた。私は黙ってその背を見送った。

私の視界から消える直前、リュウセイは振り向きもしないまま言った。

「例え操られていたとしても、俺はお前の両親を殺したことは変わりない。お前しか救えなかった俺をお前だけは憎み続けてくれ」

そしてリュウセイは私の視界から完全に消えた。

「これ以上、兄様を恨むことなんてできないよ……」

リュウセイが私のことだけは守ろうとしてくれたこと。その事実を知った今ではもうリュウセイを恨むことはできない。彼が純粹な殺戮衝動だけで両親を殺したと思いこんでいたからこそ、肉親であり、大好きだった兄を恨み続けることができた。

あふれ出てくる涙を抑えることができない。

私は10年ぶりに声を出して泣いた。

10年間我慢し続けた思いが、あとからもあとからもあふれ続ける。

恨み。悲しみ。憎しみ。後悔。怒り。そして愛。

これらの全てがごちゃまぜになって、涙となり、あふれ出す。

「父様、母様、兄様……」

ようやく涙が止まったのはもうすっかり日が落ちて真っ暗になったころだった。

震える足を叱りつけて、なんとか広場をあとにした。

「何で来てるのよ」

森の入口には仏頂面の黒いのと、今にも泣きそうなリアがいた。

「師匠、あんまり帰りが遅いから心配で……。師匠、泣いたんですか……？」

「私のことはいいの！ それよりフィアとフィイはどうしたのよ」

「ちゃんと寝かしつけてから来ました。貴女との約束は守りましたから、これからは僕個人の勝手です」

「あんたたち……」

口ではそう言いながらも、嬉しい気持ちが抑えられない。私には10年かけて見つけた仲間がいる。

「何があったのかは聞きません。今見たことも無かったことにします」

「……あんた生意気よ」

私は最初に一応そう言ってから、黒いのの肩に顔をうずめる。黒いのは私を優しく抱きしめてくれた。

「今日は何もなかったことにします。だから師匠も明日からまたいつもの師匠になってください」

リアはそう言って私の背中を優しく撫でた。

もう枯れたと思っていた涙が、あとからあとからあふれ出してくる。私はどこか冷静になった頭の片隅で、そのことに驚いていた。

「さ、待ってる人いますし、早く帰りましょう」

私の涙が止まる頃合いを見計らって、黒いのが、いや、ミカゲが声をかけた。

その言葉に私が顔を上げると、珍しくニヤニヤとミカゲがリアと笑い合っていた。私が不思議そうにその様子を見ると、リアが口を開いた。

「帰ってからの楽しみです。日が昇りきるまでに宿に行きますよ」
そう言って、白み始めた空を見つつ、私たちは3人肩を並べて走り始めた。

愛憎（後書き）

フラグー！

次回、あの人が超久しぶりに登場！？

??? 「みんな、俺のこと覚えてるよな！？」

懐かしい顔（前書き）

あの人が再登場。懐かしい。懐かしすぎます。

……というか、本編では名前しか出てないんだよね。この人。作者が可哀想過ぎて番外編の主人公にしちゃうほど、出番が少ない。思い立って、ここで再登場させてみました。

懐かしい顔

「よお、師匠！ 久しぶりだな！」

「な、あんた、何でここに来てるのよ！？」

宿屋に戻って一番最初に見たのは、図々しくも私のベッドに寝そべり、片手をあげて挨拶してくる”虎ネコ族”の少年、トーマだった。

私はトーマをジトつとした目で見つめると、あろうことが本人は笑いながら私に話しかけてきた。

「何だ、道場の奴らが心配か？」

「当たり前じゃない！ あんたが面倒見てたんじゃないの！？」

「うん、まあ、そうだったんだが。いろいろあってな……」

「そうなんです、師匠！ トーマさんったら木とか石とかが言伝に師匠が危ないって聞いていてもたってもいられなくてここまで来たそうですよ」

「とは言っても、ちょっと遅かったみたいだけだな」

「んなことどうでもいいわ！ 私って、そんなに信用ないかしら？」

トーマはちよつと困ったように考えてから、また口を開いた。

「信用というか、師匠って妙なところで自分の中に溜めこんじゃうから心配というか……」

酷い言われようである。私は一応自分の中で抱え込み過ぎないようにとときどき息抜きもしているというのに。

「んなことあんたたちに心配される筋合いはないわよ。それよか道場の子供たちのほうがよっぽど心配だわ」

「それこそ心配される筋合いはねーよ。あいつら、師匠が思ってるほど柔じゃねーぞ」

そんなこと分かっている。私とこいつらが育てたんだから。戦闘能力、生活能力、全てにおいて信頼はしている。ただ、子供を置いていく母親の気持ちというのだろうか、信頼と心配はまた別のもの

だ。

「……なんてことあんたらに言っても分からないんだろうな」

トーマだけでなくミカゲとリアまで頭の上にはてなマークを浮かべている。

「ま、これを機会に子離れするか……。ホントに大丈夫なんでしょうね？」

トーマをジトつとした目で見る。トーマは当然とでもいうような顔で答える。

「そもそも師匠は心配し過ぎなんだよ。俺は当然として、ミカゲやリアを始めとしてあいつらを見てれば分かるこつたろう。ホントは師匠が一番分かってんだろ？」

「そこで何故あんたが当然なのか気になるけど、まあいいわ。確かに私が連れていった子たちだしね。分かったわ」

私は手を挙げて降参のポーズを作る。それを満足そうに見ているトーマ。ふと外野が静かになってのに気がついて、周りを見回す。そこにいたのは目をキラキラと輝かせているリアと、興味を失くしたのか、空いてるベッドに横になっているミカゲだった。

「すごいです、トーマさん！ 師匠にそこまで言えるなんて！ 尊敬です！」

と、目を輝かせているリア君。尊敬するのはそこか！？

「いや4年以上もつきあってればこうなるって。師匠に何か言いたいことがあるば遠慮なく俺に言え。俺から師匠に言ってやる」

「調子に乗るな、このバカ！」

私に頭をはたかれるトーマ。これは当然の結果だと思う。

「痛い！ 痛いよ、師匠！ 冗談とか抜きで。本気で痛いっす！」

「当然だ。6割くらいの力で殴ったからな。これ以上力いれると骨にひびが入ると思うが、試してみるか？」

「遠慮します！」

私たちがぎゃいぎゃい騒いでいると、部屋の隅のベッドからだるそうな声が聞こえてきた。

「煩い。静かにしてください。他のお客様にも迷惑です」

「なんだよお、ミカゲ。久しぶりなのにつれないじゃないか。お前もこっち来て混ざれよ」

「何で僕がトーマさんとちと騒がなきゃいけないんですか。迷惑です」

「何だよ。昔はもっと可愛げがあったのにな。おい、リア、俺と遊ばーぜ」

「嫌です。トーマさんの遊びって、稽古じゃないですか。トーマさんの相手は嫌です」

みんなに振られて一人しよげているトーマ君。不覚にも笑ってしまった。

「何なら私が遊んでやろうか？ 久々に」

「え、師匠と……？」

「何よ、その顔。嫌なら別にいいわよ。帰ってからたつぷりと遊んであげるから」

「それも嫌……！」

何やら一人真剣に考え込んでいるトーマ。今しごかれるのも帰ってからしごかれるのも嫌だな……とか何とかブツブツ言っているが、無視。

「ま、今日はもうだいぶ疲れたしな。明日遊んでやる。お前に相手させてやりたい奴もいるしね……」

そこで私は部屋を見渡した。そこでふとあることに気がつく。

「リア、ミカゲ。フィアとフィイは？」

「2人は今隣の部屋です。貴女が帰ってくる前に眠ってしまったので。貴女が帰ったら起こしてほしいと言ってましたよ。一応2人をバラバラの部屋に寝かせるのはどうかと思ったので、一緒に寝せておきました」

ミカゲがそこまで言ったところで、部屋のドアが開く。そこからちょこんと顔を覗かせたのは、私がちょうど探していた顔。

「あ、セーラさんだ！」

「だ！」

そう言うなり、2人は私の元に駆け寄ってきた。その様子の何とも可愛らしいこと。傍にいたリアに目をやると、逸らされた。あんなに期待はするなということか。

「こいつが私の1番弟子、トーマよ。こっちは見れば分かると思うけど、狼族の双子、姉のフィアと弟のフィイよ」

「よろしくな」

「よろしくお願いしますー」

「すー」

3人は和やかに握手を交わす。互いに手を離れたところで私はまた口を開く。

「あんたに稽古の相手をさせたいのはこの子たち。どう、見た目では？」

「どうって……。この子たち、稽古できるのか？ 師匠が俺に相手させたいと言うからには相当な腕なんだろうけど」

「この子たち、こう見えてもリアと同じ年よ。腕もリアと同じかそれ以上。リア、あんたもうかうかしていると抜かれるわよ」

「そこで僕に話が飛ぶんですか！？」

こうして、私の帰還は和やかに歓迎されたのだった。

いじる（前書き）

相変わらず、リア君はいじられています。いじる人は増える一方で
す。

愛ゆえにみんないじってるんです。

いじる

翌朝、早速私たちはトーマも加えて早朝稽古にいそしんでいた。ちなみに今日の組み合わせは、私とファイア、トーマとファイイ、ミカゲとリアだ。

「そ。そこそこ。んでもって身体回したらこっちから」

「はい！」

流石、というべきか、基本的どころか応用編までかなり出来上がっているファイイ相手に、細かい指摘をしながらも全て受け流すかわしているトーマ。もちろん、わざと受けているのはファイイが体勢を崩さないようにするためだ。自分のダメージが最小限になるようにうまく受け流している。流石、私の1番弟子ね。

「そこで、膝を伸ばさない！」

「はう！」

とか言う私も指摘しつつ、かわしたり受け流したり。ついでに余所見までしている。流石は師匠？

「リア、いい加減僕に一発でも当ててください」

「うゝ、じゃあ動かないでくださいよゝ！」

情けない声が聞こえてきたと思ったら、リアだった。リアはかなりの速さで身体を動かしているのだが、なにせ相手はミカゲだ。未だに攻撃の一つも当てられないでいる。空振りしてもたいして体勢を崩さないのは流石というべきか？

「ふわああ」

とうとうミカゲが欠伸しだした。両手を頭の後ろで組んでいかにもつまらなそうだ。しかし全て攻撃はかわしている。そんなミカゲを前に、リアはもう涙目になっていた。

「リア！ あんた師範代でしょ！ ミカゲに一発くらい当てられなくてどうすんの。ミカゲが稽古で欠伸するなんて、そうそうないわよ！」

「そんな、師匠、僕だって頑張ってるんですって!」

「トーマさん、相手交換しませんか? 僕がフィイの相手しますよ」

「ミカゲさん!」?

「おお、いいぞ。リアの相手なんて久しぶりだな!」

「トーマさんまで!」?

リアのプライドは粉々に打ち砕かれたようだが、そんなの気にする2人ではない。諦めろ、リア。

「さて、久々だからなあ。たっぷりしごいてやる」

「トーマさんのしごきは半端ないんですからね! そこ、自覚します!」?

「師匠のしごきに比べたらマシだろ? さてと、どっからでもいいぞ」

「あら、私と比べたらマシ、とはどういうことかしら? ねえ、リア?」

「そこ、僕に聞くんですか!」?

そろそろ本気で泣きだしそうになってきたので、いじるのはここまでにしよう。あ、苛めてるんじゃないよ。愛ゆえにいじっているの。

—————2分後。—————

「ほら、リア! 早く俺に当ててみろよ!」

「結局相手が変わっても一緒じゃないですか!! とうるかレベル上がってますから!」!

やっぱりトーマに全てかわされていた。ついでに言うと、トーマは頭の後ろで腕を組み、時折ミカゲが相手をしているフィイにアドバイスをしている。当然、リアのほうは見えていない。

「あんた器用ね……」

「感心するところ、そこですか!」?

「私なら目瞑っててもかわせるわよ、あんたくらい」

「僕もう泣いていいですよね!？」

宿の朝食の時間が迫ってきたので、稽古のお開きを宣言すると、年下3人組はその場にへたり込んだ。もちろん、私たち年上組は息ひとつ乱してはいない。

「お疲れ様。朝食の前に身体も拭いておきなさい。ちゃんと着替えもするのよ」

「「はい」」

双子は私の言葉にそろっていいお返事を返してくれた。リアはというと、小さく手を挙げて、質問、といった。

「何で師匠たちは僕の攻撃を全て楽々とかわせるんですか？」

「そんなの自分で考えなさい」

私の即答にリアがあからさまにがっかりした顔をする。そもそも私がそう簡単に教えると思ったか。しかし、先輩2人はいくらなんでも可哀想だと思ったのか、丁寧に答えてやることにしたようだ。

「お前は、気配が強すぎんだよ」

「気配、ですか？」

「そうです。リアは気配を殺す、というようなことはしてないでしょう？ 気配というのは、そうですね……」

ミカゲは急に言葉を切ったかと思えば、いきなり私に回し蹴りをしてきた。私は少々驚きながらも難なくかわす。

「あら、はずしましたか。まあ、貴女ならかわすと思いましたけど。リアは今、僕が攻撃しようとしたことは感じ取れましたか？」

「……全く」

「このように、相手に攻撃するという意思、動きを悟られないようにすることを気配を絶つ、殺す、といいます」

「なるほど」

「で、お前はこれから攻撃します、っていう気配がだだもれなんだ

よ。これじゃ、これからここに攻撃するのでかわしてください、って言ってるのと同じだぞ」

「そうだったんですか……」

自分の弱点が分かって満足したのか、リアは気配を絶つ、気配を絶つ、と繰り返しブツブツとつぶやきながら、宿に入っていた。あ、いいこと思いついた。

私は自分の気配を絶つと、リアの後をそっと追った。私が何をしようとしているのか気がついたのか、トーマとミカゲが呆れたような視線をよこすが、無視。

リアに追いつくと、気配を絶ったままリアの肩を叩く。

「気配を絶つていうのは、こうするのよ」

「ふぎやう!？」

相当驚いたのか、リアが変な声を上げた。その驚いた顔と声を聞いたから私は満足。いやー、面白かった♪

「師匠! ヒドイじゃないですか!!!」

「私は気配の絶ち方を教えただけ。どう、分かった？」

「分かるわけじゃないですか!!!」

「あんたもまだまだねえ」

「師匠なんか、大っ嫌いだー!!」

あ、とうとうリアが泣きながら走って逃げちゃった。いじりすぎたか? ……ご飯、大盛りにしてやるか。

仲間

白いご飯が山盛りのお茶碗を前に、リアはまだご機嫌斜めだった。「だからー、リア、ごめんって。いい加減機嫌直してよ」

「……悪いのは師匠たちじゃないですか」

「だからごめん、ってさっきから謝ってるじゃない」

稽古を終え、宿の食堂に集合して早30分。稽古中にかかわれたことを未だに根に持っているらしい。

「なー？ リア、機嫌悪いー？」

「いー？」

「ほら、フィアとフィイまで心配してるじゃない。いい加減機嫌直しなさい、先輩」

「……同年だし」

あ、敬語が抜けた。こりゃ相当拗ねてるな。いったいどうしたもののか。

私が頭を悩ませていると、隣に座っていたミカゲが急に立ちあがった。何事かと思い、その姿を追うと、ミカゲはリアの後ろで立ち止まった。あっ、と思った時にはすでにミカゲの拳骨（結構本気。いい音してた）がリアの頭の上に落とされていた。

「痛っ！ 何するんですか、ミカゲさん！！」

「いい加減にしなさい、リア。周りを見なさい。他の方に迷惑がかっているでしょう。部屋で僕たちの前でならいくら拗ねても構いません。ですが、このようにたくさんの方が集まる場所で、いつまでも拗ねているのは良くないですよ。さっさと食事をすませなさい」

あれ、お前も機嫌悪くさせた原因の一人じゃなかったっけか？ よくもまあぬけぬけと。しかし、その一言でリアがハッと気がつくものがあつたらしく、少しは機嫌直したらしいのでよしとするか。

「みんな仲良しが一番ですー！」
「ですー！」

双子もニコニコだ。

というわけで、私たち一行の食事が始まった。

「さてと、無事食事も始まったことだし。トーマ、どうだった？」

私の一言にリアの誰のせいだ、とでもいうような視線が突き刺さってきたが、華麗にスルーする。リアも諦めたのか、特に何も言うてこなかった。

「どうって……。そうだな、まず一番に驚きだな。フィイはホントに初心者なのか？」

「正確には違うけど、……。ほぼ初心者よ」

歯切れの悪い私の答えに、トーマが一瞬怪訝そうな顔をするが、すぐに引っ込めて平静を装った。流石は私の弟子、とでもいうべきが、この辺の空気の読み方はよく心得ている。

ミカゲに視線を送っていたから、後でミカゲがうまく説明するだろう。

「にしてももったいないな。フィアちゃんも結構いい動きしてたし。2人が狼族でなければ……」

「トーマさん！」

リアの鋭い声に、トーマが気まずそうな顔をする。

フィアとフィイが狼族でなければ。これは私も何度か思ったことがある。そうすれば私の道場に連れて帰れたのに。

基本的に”ネコ族”は”狼族”を恐れる。私やトーマを始めとする師範代クラスの連中は何とも思わないが、道場の他の子供たちはそうはいかない。特にあの道場にいる子供たちの多くは狼族に親を殺されているのだ。親がいないネコ族の子供は、守ってくれる人がいない。だから私が定期的に森を探索しては親のいない子供たちを引き取って回っているのだ。

「フィアは悪いことしないよ？」

「フィイもー！」

「うーん、そういう問題じゃないんだけど、まだ分かんないか」

そもそも他の狼族がやったことなんて、この子供たちには無関係だ。

しかし、幼い子たちにはそれが分からない。だからこそ、連れて帰るわけにはいかないのだ。

「そうだ、せっかく来たんだから、トーマに頼み事していい？」

私は少し暗くなりかけた空気を払拭するようにわざと明るい声で言った。

「師匠が頼み事？ 珍しいな。何？」

「ちょっと追って欲しい人がいるのよ」

「師匠の目じゃダメなのか？」

「見失ったの、一昨日だから私の目じゃもう無理だと思う。あんた、木とか石から記憶読み取れるでしょ」

「なるほどな。了解。後でその場所に連れてって」

そこまで約束を取り付けてから、目の前の食事を片付けることに集中する。ふとリアのほうを見ると、あんなに大盛りにしたのに、もうご飯の山が消えている。恐るべし、成長期。

食事開始から1時間後、ようやく全員の食事が終わった。主に時間がかかるのは女性陣。はい、私とフィアのせいです。女の子は食事に時間かかるものだからね。

「ごちそうさまでした」

最後に食堂のおばちゃんに挨拶とお礼を言って部屋に戻る。あのおばちゃんのご飯、おいしかった。

「で、師匠。この後どうするんだ？」

「さっさと追わないと追いつかないから森に行くわ。みんな、荷物まとめてきて」

あいつらが私の身体を狙っているなら、私が追いつけない速度で移動するわけがないが、その辺はまだあいつらには伏せておこう。余計な心配かけたくないし。

みんな手慣れたもので、ものの数分で全員の支度が済んだ。

「あ、ヤバ。私まだ支度してない……」

「自分から言っておいて何だよ！」

少々痛いツツコミが入ったが、自業自得だろう。甘んじて受けさ

せていただきます。

「みんな、忘れ物無いわね？　じゃ、出発！」

宿を出て、森のほうへと一歩踏み出した。私の後ろには仲間がいる。

裏切り（前書き）

彼らを、彼らを嫌わないであげてください。

裏切り

「北東、だな」

トーマが手を置いていた石から手を離しながら言った。

「北東、ね。間違いなさそうだわ」

2日前、私の目の前であいづらが向かった方向と一致する。北東に何かがある。そう考えていいだろう。私は自ら、そこへ向かおうとしている。そう考えただけで身体が震えた。

「大丈夫ですか、師匠」

「ただの武者震いよ。あんたたちも私についてくるつもりなら、覚悟しておきなさい」

「今度は置いていくとか言わないんですね」

「行っても聞かないでしょ……」

答える私の声は少々呆れ気味だ。そんなところまで似なくていいのに、全員私に似て一度言い出したら何を言っても聞きやしない。自分でも自覚があるから何も言えない。

「ホント、こんな弟子を持てて大変なのか……」

「幸せなのか、ですか？」

リアのからかうような言葉に、私は眉をあげて返事する。

「距離的にはたぶん俺たちが普通に走って1日分くらいだと思う。どうする？」

「そうね、あいづらがどこに向かおうとしているのかは知らないけど、身を隠しながら追うなら妥当な距離でしょう。歩いていきましよう。それに……」

私はそこで言葉を切ってリアに視線をやる。急に目線を合わせられたリアはキョトンとしている。

「走るとついてこれなくなる子もいるかも知れないからね」

「な、師匠！ それって僕のことですか！？」

「あら、自覚あるの？ 私、リアの名前なんて一言も出してないけ

ど」

「しっかり僕の目を見て言ったじゃないですか!!」

すっかりリアの機嫌を損ねてしまった。そんな私を呆れた目で見るミカゲ。何も言ってはこないから、もう諦めの境地に入っているのだろう。

「行くなら早く行こうぜ。ほら、双子だけ先に行っちまってるぞ」

「ここ、ファイアたちの森」

「ファイも案内できるー」

慌てて先を見ると、双子たちが木々をかき分けて森の奥のほうへと向かっているところだった。

「あ、コラ！ 勝手に入ったら危ないって！」

「大丈夫。ここ、ファイアたちよく知ってるー」

「るー」

よく知ってる？ ということは、やっぱりここが狼族たちの本拠地となる森なのだろうか。

「ほら、ここー」

「みちー」

木々をかき分けて双子が指し示す地面には、よく見ると何度も通り抜けて踏みならされた道があった。

「こんなところに道が……。気づかなかった」

「師匠でも気がつかなかったのかよ」

「いえ。違います。ここが出来たのはたぶん、昨日か一昨日ですよ。たぶん、師匠を通らせるためにわざわざ道を作ったんじゃないかと」

ミカゲが少し鼻をぴくつかせながら言った。あ、カワイイ。……って、今私のこと、師匠って呼んだ？

私が驚きの視線を向けると、ミカゲは少し恥ずかしそうに顔を背けた。

「ってことは、僕たちを誘ってるんですかね。どうします、師匠？」
「誘ってるんなら乗らなくちゃ。行くわよ」

私は先頭に立つと、道に一步踏み出した。私の後ろにファイア、フ

イイ、リア、ミカゲ、トーマの順で続く。道はかなりしつかりとならされているらしく、とても歩きやすかった。

「そこ、右です」

「すー」

一本道をずっとたどっていくと、道が急に途切れた。フィアとフィイを振り返って道を問うと、二人仲良く右を指差した。

「右、ね」

「師匠!!」

あの悲鳴のような声を上げたのはリアだったのか、ミカゲだったのか、それともトーマだったのか。

確認する前に、私の意識は途切れていた。

くそ。油断していた。師匠が狙われていたのは分かっていたはずなのに。目の前で、すぐに手が届きそうなところで、師匠は崩れ落ちた。

「手前ら、そこどけよ」

トーマさんが今までに聞いたことないほどの低い声で目の前に立つものを威嚇した。

「できない」

「これ、フィイたちのお仕事」

そう言った双子の目には光がなかった。たぶん、かなり強い暗示をかけられているのだろう。それが分かっているのか、トーマさんも威嚇はできても手は出せないでいる。

「フィア、フィイ。ご苦勞様。自分たちだけでできそう?」

「リュウセイさん……」

僕の口から驚きの言葉がもれる。崩れ落ちた師匠を抱えているのは、数週間ぶりに見る師匠の兄、リュウセイだった。

「ミカゲさん、リュウセイって？」

「師匠のお兄さんです」

双子から目線を外してはいないが、気配でトーマさんとリアが驚いたのが分かった。無理もない。実の兄が直接妹を襲いに来るなんて、思いもしなかっただろう。

「ミカゲか。久しぶりだな。悪いけど、カランはもらっていくよ。俺たちにも必要なんでな」

「師匠を、どうするつもりですか」

「神殿」

リュウセイが面倒臭そうにぼつりと言った。

「この森の北東に神殿がある。知りたければそこに来い」

それだけ言っ、リュウセイは師匠を抱え直すと、森の奥へと消えていった。

「一つだけ言い忘れたけど、その子たち、天才だから」

僕たちの視界から完全に消え去る直前、リュウセイがそう言った。あいつの言う”その子たち”が誰を指すかだなんて、火を見るより明らかだった。

「フィア、お前たちをここから先へは行かせない」

「フィィ、お前たちを倒す」

「マジかよ……」

双子の腕前はトーマさんも実際に見ている。本気の二人を自分も相手も怪我をさせずに戦闘不能にするのはほぼ無理であろう。

「本気、ですか」

「「本気」」

「仕方ないです」

静かに構えた僕をちらりと見て、トーマさんは少し驚いた顔をした。

「ミカゲ、本気か」

「手加減できる相手じゃありませんから」

「じゃあないか。お前ら、恨むなよ」

「二人とも、本気なんですか!？」

「リア」

僕はリアにやるべきことを目線のみで促す。リアはハツとした表情になって、小さく頷くと、構えた。

「早く、師匠を追いましょう」

僕のその一言で、両者ほぼ同時に動き出した。

裏切り（後書き）

最初からこうするために、2人は彼女たちに近づいた。
約束を守る。ただそれだけのために。

追跡（前書き）

いよいよクライマックスに近づいてきました。
これから一気にラストまであげていききたいと思います。

追跡

「ミカゲ、結構やばいぞ」

「分かってます。もう少し、もう少しだけなんとかありませんか」

「馬鹿。誰に物を言ってるやがる」

実際、トーマさんの戦い方を見ていて、かなり本気を出しているのが分かった。それこそ稽古のときの比ではない。下手に手を抜くとどちらかが大怪我をするからだ。

ちらりとリアのほうをうかがうと、時折耳がピクリと動いている。どうやら苦戦しているようだ。

「フィイ、平気？」

「平気。姉さんは？」

「平気。リュウセイさんの約束、ちゃんと守ろう」

「うん」

感情の光が一切消えた2人の瞳。人間は人を傷つけるとき、感情があれば一瞬躊躇するものだ。しかし今の2人にはその抑えが無い。躊躇なく人を傷つけようとするものを相手に自分も相手も傷つけないようにするのは至難の業なのだ。

「ミカゲ、フィイの体勢、崩せそうか？」

「たぶん無理だと思いますが、やってみます」

僕はそう言って右足を地面に滑らせるようにして一歩踏み出す。

そのまま地面を強く蹴り、一気に5mほどの距離を縮める。

地面すれすれの高さを滑るようにして飛び出した僕の身体は、一直線にフィイの元へと行く。一瞬絡み合う視線。その何も映さない虚ろな瞳に、ゾクリと背筋を冷たいものが通る。

フィイとぶつかる直前、身体をわずかにひねって背後へと回り込む。低い姿勢はそのまま、足払いをかける。

「フィイ」

僕の足がフィイに届く直前、その間にフィアが割り込む。そして

タイミングを合わせて僕の足を上にはじいた。その勢いに乗せて宙返りし、さがる。

トーマさんの脇までさがる頃にはもう、フィアは元の位置に戻っていた。リュウセイが師匠を連れて消えていった道の前。

「やっぱり難しいか。先に誰かを行かせるわけにはいかないし」

「元を絶つしか……」

「いた……」

視線は双子から逸らさないまま、リアは静かに呟く。足がわずかに動いて示したのは双子の右斜め後ろ。トーマさんの正面。

「ミカゲ、リア。30秒」

それだけ言って、トーマさんは地面をけった。とほぼ同時に動き出す僕とリア。僕とリアが向かったのはトーマさんと双子の間。僕はフィイト、リアはフィアと向かっている。

トーマさんはそのまま木々に間に突っ込んでいった。

それまで何も感情を映さなかったその目に僅かに動揺が見えて、僕は自分の予想が正しかったことを確信した。

「フィイト！」

フィアがそう叫ぶと同時に、フィイトが駆けだす。その前に回り込む僕に、フィアが突っ込んでくる。と同時にリアが回りこんできてフィアの進路を塞ぐ。

「姉さん……」

フィイトが地面を蹴ろうとしたのを見て僕が構えた途端、急に糸が切れたかのようにフィイトの上部が傾く。慌ててフィイトを受け止めると、ほぼ同時にフィアも倒れ込んだらしい。リアも慌てて受け止めていた。

「殺してないですよね？」

「当たり前だ」

そう言いながら戻ってきたトーマの頬は、軽く切れていた。僕は眉をひそめながら問う。

「短刀、ですか」

「ああ。しかも、お前の一族のもんだろ、これ」

トーマが投げてよこした短刀は、確かに僕たち、”黒ネコ族”が7歳の儀式のときに授かるものだった。傷口に見覚えがあったので、まさかとは思ったが、どうやら本当だったらしい。

「お前らのところ、危ねえかもな」

「あれでも”黒ネコ族”は武闘派の一族です。籠城でも何でもして自分たちで何とかしてますよ」

「それよりも師匠、ってか」

「茶化している暇はないでしょう。さっさと追いますよ」

「へいへい」

トーマさんが木々に手を置き集中しだすのを確認して、僕はリアと相談を始める。

「フィアとファイ、どうしましょうか」

「ここに置いていくわけにもいけませんね。僕もこの子たちに背後襲われるのは嫌です」

「かといって連れて行って目覚めたときに暗示が解けていなかったら……」

「いや、その心配はないだろう」

話に割り込んできたのは、いつの間にか集中を解いていたトーマさんだった。

「暗示かけている側の記憶を飛ばしてきた。かけられる人がいなければ暗示もかからないだろ」

「記憶とぼしたって貴方は……。かなり危険なことです。一歩間違えれば死ぬじゃないですか」

「その辺の加減は心配すんな。慣れてる」

「そんなことに慣れないでくださいよ……」

何故そんなことに慣れるような生活をしていたのかは恐ろしいので聞かないことにする。一歩間違えれば自分も同じ生活を送ることになっていたはずだ。

「とにかく急ぎましょう。師匠が心配です」

「リアはホントに師匠が好きだな。さてと、俺はフィアを背負うから、ミカゲ、お前はフィイを背負え。リアはいつも通り、周りの警戒を頼むぞ」

「はい」

トーマさんはフィアを背負うと、駆け足程度の早さで走りだした。そのすぐ後を追うリアとフィイを背負った僕。

「これから気配を完全に消す。リアもできるな？ 絶対に見失うなよ」

言い終わると同時に、トーマさんが消えた。

目の前に姿だけは見えてるが、まるでそれが幻のように感じられる。

自分の気配も消しながら、トーマさんの後をしっかりと追う。あれは幻ではないかと疑い出す気持ちを押さえこんで、ただひたすらトーマさんの姿を追った。

気配を探ってみると、リアの気配も感じられないから、うまく消すことができたようだ。

（師匠、どうか無事で）

僕はそっと祈りながら、日が暮れ始めた森をひたすら走っていた。

敗北

僕たちが師匠と別れた場所から、警戒しながら走ること約1日。目の前に大きな建物が見えてきた。その手前300mくらい位置で立ち止まる。双子はまだ眠ったままだった。

「あれで、間違いないよな」

「あたりに狼の気配はありませんが、たぶんそうでしょう。入りますか」

「待って下さい。中から誰か出てくる音がします」

リアの警戒の声に、僕たちは息をひそめて入口をうかがう。中から黒い長身の男が出てきた。

「リュウセイさん……。間違いなさそうです。行きましょう」

「行くなって、隠れなくてもいいのかよ」

「リュウセイさんが出てきた時点で、ここに僕たちがいることはすでにバレています。隠れても意味無いですよ」

僕は何のためらいもなくフィィを背負ったまま神殿の方へ向って歩き出す。後ろを恐る恐るついてくる、フィィアを背負ったトーマさんとリア。

「意外と早かったな。もう少しかかると思ってたぞ」

「生憎、僕たちはそれほど甘く鍛えられていませんから」

「カランの訓練の賜物か」

おかしそうにリュウセイさんが笑う。途端にムツとする僕たち3人。

「悪い。別にお前らを笑った訳じゃない。しかし、お前らもほんとにカランのことが好きだよな」

「セーラです。いい加減、覚えたらどうですか」

「俺の中でカランはいつまでもカランだ。それよりも、フィィア、フィィ。いい加減起きろ」

リュウセイさんの言葉に固まる僕ら。恐る恐る後ろに背負ってい

る双子の様子を窺う。

「フィア、ちゃんとできてましたー？」

「たー？」

気がつけばそこにはもう双子の姿はなく、慌てて振り返るとすでにリュウセイさんの隣にいた。

「上出来。さて、最後のひと仕事といきますか」

「師匠は中だな？」

「さあ。入ってみたらどうだ？ まあ、そう簡単に通しはしないが」
リュウセイさんの返事を聞いて戦闘態勢に入るトーマさんとリア。
僕も静かに構えを取る。対するリュウセイさんはその場に立ち尽くしたまま、一向に構えようとしなない。

「さっさと構えろよ」

「わざわざ待ってたのか？ 見かけによらず、律儀なやつだな。い
いぜ。どっからでもかかってこいよ」

「そうですか。では遠慮なく」

僕は身内であろうと容赦はしない。未だためらっているトーマさんとリアを置いて駆け出す。正直リュウセイさんはそんな余裕を持て
る相手ではない。構えないというなら好都合だ。

「ミカゲもまだまだ甘いな」

体同士が接触する直前、リュウセイさんがそう呟くのが聞こえた。
嫌な予感がし、方向転換しようとしたときにはもう遅かった。

「おやすみ」

「え……」

首筋にチクリと痛みが走ったかと思えば、急に全身から力が抜けた。
崩れ落ちる身体を抑えることができなかった。

「ミカゲ！？」

「……………ッ！」

渾身の力を振りしぼって身体を捻る。直後それまで僕がいたところにリュウセイさんの足が突き刺さる。地面が抉れるのを見て、背
中に冷たいものがはしった。

「よく頑張ったな。それに敬意を表して追撃はしないで置いてやる」
「くっ」

地面から身体を起こすこともできない僕を見て固まるトーマさんとリア。僕自身も驚いている。今までどんな攻撃を、たとえ師匠でも、受けても行動不能になることはなかった。

「ああ、なぜ動けなくなったか？ そんなの簡単だよ。これ。俺のお気に入り」

そう言ってリュウセイさんが取り出したのは長さ10cmほどの長い針だった。その先端は何か液体が塗られていた。

「ただの麻痺毒だ。死にはしない。安心しろ」

そしてそのまま特に構えもしないまま、地面を蹴った。そんなに強く蹴ったようには見えなかったのに、その速さに虚をつかれて一瞬トーマさんとリアの反応が遅れた。

「やっぱりダメ！」

「ダメなの！」

リュウセイさんの毒針がトーマさんとリアに触れる直前、そこに小さな2つの影が飛び込んだ。とたんに崩れ落ちる2つの影。

「フィア！？ フィイ！？」

とっさに身体を受け止めるトーマさんとリア。それを感情のない目で見つめるリュウセイさん。

「フィア、今度はセーラさん守りたい。もうトーマたちと戦いたくない」

「フィイも、フィイもセーラさん守る」

「……暗示が切れたか。まあ、いい。これでお前らも用無しだ」

リュウセイさんがぼそりとそう呟いた。誰よりも早く反応したのは、誰よりも耳がいいリアだった。

「いらないうってなんですか！？ この子たちは、貴方のために頑張ってたんじゃないですか！」

「止めろ、リア……」

僕の制止も聞かずにリアが飛び出した。慌てて引き留めようと飛

び出すトーマさん。しかしそれもリュウセイさんの思惑通りだった。

「カランが鍛えたというから楽しみにしていたのに。がっかりだな」

「リュウセイ、終わったのですか？」

女性の声が聞こえて神殿の入口を仰ぐ。そこから出てきた人に、地面に伏した僕たち5人は驚愕のあまり声も出せなかった。

「師匠……？」

呆然とつぶやくリアの声が聞こえた。

愛（前書き）

家族の愛は、何物にも負けないと思うんです。

愛

「お疲れ様です」

「うふふ、この子意外と意志の力が強くて飲み込むのに時間かかってしまいました。力が欲しい……」

そう言って師匠、の中の誰かは僕らをじっと見つめた。

「皆さんいい力を持っているんですね。あたし、あの双子が喰いたいです」

その言葉に双子が緊張する。しかしすぐにその緊張は解かれた。

「ダメです。仮にも同じ種族でしょう。貴女が守るべき対象を喰ってどうするんですか。喰うなら俺にしてください。あいつらより力も多いでしょう」

リュウセイさんが僕たちと師匠の間に立ちほだかるように立つ。

「あたし、リュウセイはよく頑張ってくれたからずっと傍に置いておいてあげようと思っていたのですが」

「すぐに力が欲しいんでしょう。なら俺を喰ったほうがいい」

「あら、おかしな子ですね。自分から命を差し出すなんて。まあ、いいわ。そこまで言うのならリュウセイを喰わせてもらいます」

そう言うと、師匠がリュウセイさんに目配せした。頷くリュウセイさん。リュウセイさんは茂みに向かって手を振ると、茂みから何人もの狼が出てきた。正直、これほどの数がいたのに気付かなかつたなんて思うと寒気がした。

「神殿の中にこいつらを運んでくれ」

そう言ってリュウセイさんが一番近くにいた僕を抱えあげた。

リュウセイさんが僕を神殿の床に下ろす直前、僕はこっそり尋ねてみた。

「師匠の中に入っているのは」

「ルーパス」

そう短く答えた。耳のいいリアならもちろん聞こえていただろう

し、この神殿の床は大理石だ。トーマさんはさりげなく床に意識を集中させていた。すぐに聞きだすだろう。

”ループス”。それが師匠の中に入っている奴。確か神狼と呼ばれる存在だったはずだ。昔師匠の家の書斎に置いてある本の中にそんなことが書かれていたような気がする。

ループスは一人、神殿の正面中央奥に位置する階段の前に立ち、僕らを一瞥すると口を開いた。

「皆さん揃いましたね。それではこれから皆さんには本当のあたしの復活のときを見せてあげますね」

そう言っって懐からひと振りの短剣を取り出した。それを僕たちに見せつけるようにして構える。

「これ、何だか分かりますか？」

「それは師匠の……」

「よく分かりましたね。そう。族長一家を刺し、命を奪った短剣。それだけでかなりの力を持っています」

そしてループスは手に短剣を構えたままリュウセイさんを手招いた。素直に近づくリュウセイさん。

「リュウセイ、今まで10年間本当にありがとうございました。さようなら」

そのままなんの躊躇いもなく、短剣をリュウセイさんの左胸に突き刺した。

「……ダメ。いや、嫌よこんなの……。……？」

目の色は何も変わらないまま、ループスからそんな言葉が漏れてきた。

「何、まだ意識が残っていたんですか。しつこいですね。いい加減服従したらどうですか」

「いや。私の短剣でまた家族を刺すなんて、嫌だ」

それは不思議な光景だった。同じ口から二つの声が聞こえてくる。まったく同じ声なのに、全く違う声。

「私の中から出ていけ!!」

「!？」

一瞬師匠の身体が眩しく光り輝いた。あまりの眩しさに思わず目を瞑ってしまう。再び目を開いた時には、そこにはいつも通りの表情の師匠と、それまでそこにはいなかった見たこともない女の人を立てていた。

びっくりした。背後から不意をつかれて気を失い、気がつけば自分が最も憎む身内が胸から血を流している。その胸から突き出ているのは、私が誰よりもよく見知ったもの。

「また、私がやったの？ 父様と母様のときのように？ ねえ、兄様、答えてよ……」

目の前にいる唯一残された肉親、リュウセイの姿しか見えなかった。

「カラン……？ 良かった、元に戻ったのか……」

胸の短剣をそっと引き抜く。それを傍らに置いて、私は出来るだけ優しく、実の兄を抱きしめた。頬からひとしずく、涙がこぼれおちた。

「お前だけは……、無事……よかった」

「嫌……嫌だ!!」

兄様がまるで最後の力を振り絞るように、優しく笑った。10年ぶりに見る兄様の優しい笑顔。何でこんなときにまで笑おうとするのよ。

「お前だけは、お前だけは絶対に許さない……!」

私の両目からは後から後から涙が溢れだしてくる。それを拭おうともせず、私はルーパスを睨みつけた。そっと兄様を床に横たえろと、その懷からひと振りの短刀を抜きだす。兄様のだ。

「あたしを追い出すなんて……。面白いわ。ますます気に入りました。こうなったら少々力づくでもその身体、いただきますね」

「あんたなんかに渡すもんか。200年前、私の祖先がしたように、あんたを封じ込める」

「何の知識も無いのにどうやって、ですか？」

ルーパーが可笑しそうに笑う。私もできるだけ不敵に笑って宣言した。

「簡単よ。あんたを倒せばいい」

「何、あたしを倒す、ですか？ カランさんはとても面白いことを言うのですね」

今度は腹を抱えるようにして大笑いしだす。しかし、私の目が本気なのを見て笑いをひっこめた。

「本気、みたいですね。いいわ。相手してあげましょう」

静かにルーパーが構えた。私も兄様の短剣を構える。一気に空気が張り詰める。

私は息を詰めると、心の中で3秒数えた。数え終わると同時に床を蹴る。ルーパーもほぼ同時に地面を蹴った。

ルーパーと身体が交差する瞬間、私は目を閉じた。絶対に、負けない。

愛（後書き）

師匠、復活。次回活躍します。

最終決戦（前書き）

師匠VSルーパー

これで全てが終わるんです。

最終決戦

目を瞑って自分を中心とした全方位に神経を集中させる。

「師匠、目……」

一瞬私が目を開けた時にちらりと見えたのか、トーマが微かに声を上げた。普段の私は黒髪に碧の目をしている。が、今は……

「金、色？」

私の能力完全開放。それがこの能力”千里眼”だ。視力を全て失う代わりに、全方位の視覚情報を全て知覚する。光を失った私の目は碧から金色に変わる。それゆえに、私は背後から襲われることなく、不意を突いて攻撃することも可能だ。

「師匠、すごいです。こんな師匠、初めてみました……」

これが私の本当の力。リアを始め、その場にいるループス以外が全員驚いている。私はループスの動きをとらえながらも、しっかりとその様子を視ていた。

「これが貴女の本当の能力なのですね。ますます気に入りました」

「よくもそんな余裕が持てるわね。一応私がこの力を解放して負けたことはないんだけど？」

ループスが鼻で笑う。弟子たちとは違い、全く動じない様子に苛つきを通り越して感嘆すら覚える。

「どうしたのですか。あたしのことはしっかり見えているのでしょうか？　ちゃんと当ててください」

「言われなくてもッ！」

私の渾身の回し蹴りを受けて僅かにループスの身体が後ろに押される。

「よくもまあ、私の渾身の一撃を受けてその程度で済むわね。驚きを通り越して呆れるわ」

「良くも悪くも霊体ですからね。さあ、どんどん行きますね」

そういうなりループスが床を蹴る。一瞬速さで見失いかけるが、

全方位を知覚する私には関係ない。普通の人だったら背後に回り込まれて完全に見失うだろうけどね。

身を屈めてループスの上段回し蹴りを回避し、その勢いのまま足払いをかける。ループスはバックステップでかわした。

「全方位知覚、ですか。面倒臭い能力を持っていますね。さて、どうしましょうか」

口調は困っているようにみえても顔が笑っている。その冷たい笑顔に私の背筋に冷たいものが走る。無言で気を引き締める。

「そうです。あたし相手に油断しないのはとてもいいことですよ。そのままあたしを喜ばせ続けてください」

「私はあるたの機嫌取りのために戦ってるわけじゃないんだけど」「結果は同じですよ。さあ、続けましょう」

狂っている。私は素直にそう感じた。私が素早く動けば動くほど、強攻撃を当てれば当てるほど、ループスの笑みは深まっていった。まさに戦いに狂った者。

焦ってはならない。自分に言い聞かせながら、冷静に相手の動きを観察する。私の渾身の一撃を与え続けても顔色一つどころか眉毛の一本も動かさないような相手だ。焦った瞬間、飲み込まれる。しかし私も生身のネコな訳で。

「さすがに疲れてきましたか？ 生身の身体も大変ですね」「うるさい！」

口ではそうは言ってみたものの、自分の体力の限界は自分が一番よく理解している。全方位が知覚出来ても私の反応が遅れば意味がない。この能力は私の基礎能力の高さと合わさって初めてその威力を発揮するのだ。

「もう少し楽しみたかったけれど……。そろそろ終わりにしましょうか」

途端にループスの纏う空気が変わる。滅多に気圧されることが無い私が、そのあまりにも大きい存在感に気圧された。

「……何のつもりですか」

ループスが低くそう言った。よく見るとループスの身体は完全に静止していた。そしてループスの身体から流れてくるこの懐かしい気配……。

「兄、様……？」

私がそう呟くと、ループスが口を開いた。反射的に身体を固くしてしまう。

「カラン……、ループスの、本体……上」

「兄様……、兄様なの？」

「そんなに長くは止められない……。早く」

そう言ったループスの目には早くも元の光が戻り始めていた。兄様の頑張りを無駄にしてはならない。私はループスの脇を通り抜け、正面の階段を駆け上がり始めた。

「何段あるのよ、これ！」

ざっと目測で50m。100段ほどだろうか。正直今の私に100段を速度を落とさずに昇り続けるのはきつい。

それでもなんとか昇りきると、頂上には大きな棺のようなものが置かれていた。短剣を持ち直してゆっくりと近づく。

中を覗くと、そこには獣が横たわっていた。銀色の毛を持ち、狼族と同じ耳を持っている。これがあの伝説の神狼の本体なのだろう。

「これで、終わる……」

「止める————！！！」

私がループスの霊体が階段を昇りきって背後に現れるのを知覚したのとほぼ同時に、私の手に握られている兄様の短刀が獣の身体に沈んだ。

「———あああああ——！！！」

……終わった。背後からループスの断末魔の叫びが聞こえて私はそう確信した。

「————ッ！」

「一人でなど……、死んでたまるかッ！」

トスツという軽い音と共に、何かが背中に突き刺さる感触。意識

を背中に集中させて、その異物を確認する。それは私が一番良く見知ったもの。

「お前は、私たち一家を殺すのね……」

私の短刀が私の背中から突き出ていた。

最終決戦（後書き）

次回、最終回。

帰る場所

「痛あ……」

「師匠！？ 目が覚めたんですね！」

呻き声をあげる私の横で大声を出しているのは誰だ！！ ……つて、リアか。私は一睨みして黙らせる。そこにまあまあ、と仲裁に入ったのはミカゲだ。

「師匠、リアはずっと貴女のことを心配してずっと傍にいていたんですよ。ホント、一時はどうなるかと思いました」

「私はそんな柔じゃないわよ」

「そういう問題じゃありません！ そもそも師匠は仮にも女性なんですよ！？ もっとご自分の身体を大事になさってください」

「そうだ。ミカゲ、もっと言ってやれ」

ニヤニヤしながら会話に入ってきたのはトーマだ。こいつにも一睨みして黙らせる。

「師匠、その癖直さないと誰もお嫁にもらってくれませんよ」

「いいわよ、別に。私結婚なんてする気無いし。ずっと道場にいるわ」

「それは困るなあ。……兄として」

「え……？」

背後から聞こえた声に、私は驚いて振り返る。そこには上半身を包帯でぐるぐる巻きにした兄様がいた。

「兄様、無事だったの？」

「ん、俺が無事で何か困るのか」

「いや、むしろ嬉しい！」

私は思いつき兄様に抱きついた。兄様が痛みで顔をしかめるのが分かったが、さりとて無視してそのまま腕に力を込める。

「師匠って、こんなにブラコンでしたっけ」

「いや、そもそも俺は師匠に兄弟がいることすら知らなかった」

「僕もそうです」

後ろの弟子3人から何やら冷たい呆れるような視線を向けられているような気がするが、うん、まあ、気のせいだろう。

「セーラさん目覚めたー？」

「たー？」

神殿の外からフィアとファイイが中に入ってきた。フィアの手には清潔そうな真っ白い包帯やタオル。ファイイの手には籠いっぱい果物が入っていた。

「セーラさん無事でよかったのー」

「これ食べるのー」

満面の笑みで籠を差し出すファイイ。か、可愛い！！

「師匠、フィアとファイイには感謝しなければなりませんよ。師匠の怪我也、リュウセイさんの怪我也、包帯とか見つけてきて手当てしてくれたのはこの2人なんですから」

「そうだったの。ありがとう」

「お礼されることじゃないよ？」

「ファイイたちはセーラさんに恩返ししたかった」

そう言いながら、フィアは私と兄様の包帯を取り替えてくれた。兄様の包帯を外した時、左胸に残る傷跡がとても痛々しかった。思わず目をそらしてしまった。

「兄様。兄様は左胸を刺されてたよね。どうして生きていられたの？」

「うん？ ああ。実はあの短刀、心臓から少しずれてたんだよ。カランの短刀は最後の最後に、俺たち兄妹を助けてくれたみたいだ。大事にしろよ」

私は深く頷いた。そっと自分の短刀を腕の中に包み込む。私の両親の命を奪った短刀だけど、私たち兄妹の命を守ってくれた。それだけで、私はこの短刀を大切に思うことができるような気がする。

「セーラさん！ これ、どうぞ」

「ありがとう、ファイイ。これは？」

「それはこの森で採れる果物、リンゴだよ。食べると元気が出るの！」

フィイが満面の笑みで差し出した赤い球体のものは、いい匂いを漂わせていて、見るからにとってもおいしそうだった。

「……ん、おいしい！」

「でしょ？ 僕のオススメなの！」

甘いけれどさっぱりとした味のリンゴは、久々に能力を完全開放した後の気だるい身体に心地よかった。

「ところでフィア、この包帯とかどこから持ってきたの？」

「ここの近くに狼族のリュウセイさんが作った狼族の待機所のようなところがあるんです」

「そこには衣類とか保存用食糧とか、救急セットとかが置いてあるんです」

「泣きながら2人が飛び出していったときはどうなる事かと思ったが、この2人のおかげで師匠たちを手当てすることもできたしな」

「ホント、フィアとフィイは師匠の命の恩人ですよ」

「そうだ。こんな機会滅多にないから何か師匠にお願いしてみろよ」

「ちょっと、あんたたち、何勝手なこと言って……」

「セーラさん、フィアたちのお願い聞いてくれるのー？」

「のー？」

「……だから目をキラキラ輝かせて上目遣いに物を頼むのは反則だろうー！」

明らかに怯んでいる私を見て、トーマ以下弟子3名、兄様の4人は大笑いしだした。特に兄様なんて笑いが傷に響いているのか、目に涙をにじませている。なら笑わなければいいだろうー！！

「……分かったわよ。その代り、私が叶えられる程度にしてよ」

「いいんですか！？」

「やったー！」

無邪気にはしゃいで喜んでいる2人を見ると、機嫌が悪くともつい頬が緩んでしまう。つい何でも願いを叶えてやりたくなってしま

う。そうになったら弟子3人を使えばいいか。

「あのね、ファイアたちを」

「セーラさんのところに置いてほしいの」

「それは……」

私は考え込んでしまう。正直言ってこの双子なら性格的にネコに混じっても問題ないはずだ。しかし問題は私の道場のほうだ。狼に本能的嫌悪感を持っている子たちが多い。下手に連れて帰れば互いに精神をすり減らして嫌な思いをするのがおちだろう。

「カラン、俺からも頼む。こいつらも親がいないんだ。お前のところなら安心して預けられる」

「兄様は預かれないの？」

「俺はお前のところに行くつもりだが？」

「ふざけんな!!」

いきなり大声を上げ始めた私に双子がびくりと身を竦ませる。私は慌てて笑顔を作って双子に向けた。

「師匠、俺、この2人を道場に連れて行っても平気だと思うぜ」

「何を根拠にそんなこと言えるのよ」

「師匠はこの数年間で子供たちを鍛えただろう？　その時俺たちは師匠からいろんなことを教わったんだ」

「そうですね。現に僕たち、ファイアにもファイイにも普通に接しているでしょう」

「偏見をなくすこと。これが師匠から一番初めに教わったことです」

「あんたたち……」

目にジワリと涙が浮かぶ。

「偏見なんてあったら僕たちの能力が普通のネコに受け入れられるわけじゃないじゃないですか」

「そうだったわね。……分かった。ファイアとファイイはうちに連れて帰る！」

「ホントですか!？」

「ありがとうございます！」

フィアとフィイが嬉しそうに同時に頭を下げた。それを微笑まげに見つめる外野5人。

「そうと決まればさっさと帰るわよ。こんなところにいつまでも居たくないし。兄様も大丈夫？」

「ああ。これくらい問題ない。普通に歩くぐらいなら助けなしでもいいける」

「じゃ、帰るわよ。兄様も仕方ないから北の森に帰るまではうちに置いてあげる」

私が悪戯げな笑顔を向けると、兄様は少し照れたように苦笑した。右手にはフィア、左手にはフィイの手を握り、後ろにトーマ、ミカゲ、リアを連れ、そのさらに後ろに兄様を連れて私は神殿を出た。

外はもう夕焼け色に染まっていて、あまりの美しさと眩しさに、私は碧色の目を細めた。

「さて、帰りくらいはのんびり行きましょうか」

日が沈みかけた道を仲間とともに、いつもの場所へと歩き出した。

帰る場所（後書き）

これにて、『気ままに。』の第1部は完結です。
ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

感想、リクエスト等がありましたらお気軽にどうぞ。

第2部にいく前にトーマ君と兄様の短編をアップしたいと思います。
引き続き、師匠たちをよろしく願います。

願わくば、この物語があなたにとって楽しいものでありますように。

美織

望まれない客（前書き）

新章スタート!!

望まれない客

「くああ。……暇」

「せめて平和といってください、師匠」

ルーパーとの件がひと段落し、稽古場に大人数で帰還した私たち一行は、特にこれといった事件もなく、平穏無事な日々を過ごしていた。

「こう何もないと、幸せを通り越して暇だわー。自分で何か起こしてやろうかしら」

「それは止めてください。師匠が本気で事件起こしたらそれは犯罪になります」

ちなみにこの稽古に使っている建物のはずせる戸（一部はずせない戸）を全て取っ払って大変風通しがよく、日が当たってぽかぽかと気持ちがいい場所には、私とリアしかない。

最近暇している私の様子を感じ取ったのか、兄様とトーマ、フィにフィアは朝早くから森に入って狩りだか稽古だかをし、ミカゲは行方知れずだ。

さすがに付き合いが長いだけあって、私が暇になると何をしでかさか分からないことを知っているらしい。自分で言うのもなんだが。

「師匠、外に誰か人が立ってましたよ」

そう言いながらひよつこりと顔を出したのはミカゲだ。朝から姿が見えないと思ってたら、野菜を取りに言っていたらしい。

稽古場から少し離れたところにミカゲは小さな畑のようなものを作っているらしく、そこで採れたのであろう野菜を両手に抱えていた。

「お客さん？ めんどい。リア行ってきて」

「師匠暇してたんじゃ……。行ってきます」

私の顔を見たリアはそそくさと外に向かった。最初からそうすればいいのに。

「あー、暇」

そう言った私をミカゲがジトツとした目で見た。

「貴女って人は……。そんなに暇なら自分で行ったほうが良かったんじゃないですか」

「だって、めんどい」

悪びれもなくそう言った私に、ミカゲはそれ以上何も言わず、ただひとつだけため息をついて立ち去った。

「……………!!」

「……………!!?」

何か外が騒がしいな。あのリアがお客さんともめてる?

「ミカゲ! って、いないか……。しゃあない、私が行くか」

私が外へ向うと、そこにはリアと身長がほぼ同じくらいの女性が、リアと押し問答しているところだった。

「リア、さっきから騒がしいわよ。その方は?」

「師匠! 来てくれたんですね。この人、見覚えありませんか」

私の登場に顔を輝かせたリアが、女性を指さして言う。

「……リアの知り合い?」

「ホントに覚えてないんですか……。この人は僕の母親です」

「貴女が今のリアの保護者ですか。突然で申し訳ありませんが、この子は連れ帰させて頂きます」

女性は一瞬心剥き出しのままそう一方的に告げると、無理やりリアの腕を掴んでこの場を立ち去ろうとした。しかし、そう簡単にリアを連れていくことなどできるはずはない。

「いったい突然何なんだ。2年前僕を捨てたくせにいきなり連れて帰る? ふざけるな」

あの日、リアは凄く傷つけられた。今でこそ割と普通に話せるようになったが、それまでは一人遠慮して、誰からも離れて日々を過ごしていた。そのすべてがこいつのせいだ。

「あの雨の日から僕はもう師匠のところはずっといると決めたんだ。今更もう遅い」

普通のリアにしては珍しく言葉遣いも乱暴に、語調も荒々しくなっている。

「この人が師匠……？ でもこの人、”黒ネコ族”でしょう？」

「だからなんですか。ここでは種族なんか関係ない。同じ種族でもお前は僕を捨てた。違う種族でも師匠は僕を拾って大切にしてくれた。僕にはその事実だけで十分だ」

「リア、言い過ぎだ」

それまで私はずっと黙っていたが、さすがに口をはさんだ。いくら捨てられたからといって母親に向かってお前、は言い過ぎだろう。「僕の2年間の恨みはこのくらいじゃ収まりません。これくらいで丁度いいんです」

「よくない。リアの肉親でしょ。大切にしなきゃダメ」

私の言葉にリアが少しハッとしたような顔をして、すぐに気まずそうな顔になった。私の両親がすでにいないことを思いだしたのだろう。私の肉親を大切にしろという言葉は少しは重みがあったらしい。

私たちのやり取りをじっと見ていたリアの母親はしばらく黙っていたが、少し何かを考えるそぶりを見せると、また口を開いた。

「私の言うことよりも、貴女の言うことをきくのですね。そうですか。……分かりました。今日は帰ります」

「もう2度と来るな！」

「リア……！」

あんたは反抗期のカキか！！

私の窘めに、いつもはしゅんとなるのに今日に限ってはそっぽを向いている。こういうところを見ると、まだ10歳なんだな、と思う。

結局リアは母親が帰る前に背中を向けて立ち去ってしまった。ホントに反抗期のカキだな。

きつと母親は苦笑いを浮かべているんだろうな、と思いながら振り返ると、そこにはぞつとするほど感情の抜けた目をした女がいた。

外見は母親のままだが中にいるのは全く別人のように感じる。

私は反射的に気を引き締めて気づかれないように構える。

そんな私を見た母親が不気味に笑った。

「そんなに構えなくても大丈夫ですよ。まだ貴女には何もしてません。まだ、あの子が戻るまでは」

そうとだけ言い置くと、まだ緊張している私をそのままに、くると背を向けて立ち去っていった。

「暇な時間も終わり、か……」

母親の姿が見えなくなつて、構えを解きながら私はぽつりと呟いた。

何かが起ころうとしている予感がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745w/>

気ままに。

2011年12月21日20時57分発行